

1989

1

聖徒の道

末日聖徒イエス・キリスト教会



聖徒の道

1989年1月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本書は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——アイスランド語。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン

十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・パッカー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オーグス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：ヒュー・W・ピノック、ジーン・R・クック、ウィリアム・R・ブラッドフォード、ジョージ・P・リー、キース・W・ウィルコックス

編集長：ヒュー・W・ピノック

教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

編集主幹：ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：デビッド・ミッチェル、アン・レムリン

制作：レジナルド・J・クリステンセン、シドニー・N・マクドナルド、ジェーン・アン・ケンブ、ティモシー・シエパード、ステイブン・デイトン

聖徒の道 1989年1月号第33巻第1号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)
普通号150円,大会号350円

International Magazines PBMA 8901JA

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright © 1989 by the Corporation of the Presentation of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saint. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道」予約申し込み用紙でお申し込みになるか、または現金書留か郵便振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106東京都港区南麻布5-10-30管理本部経理課☎03-440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒194東京都町田市小川1704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター☎0427-96-2820

The Seito no Michi is published monthly by the Corporation of the President of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saint. Application to mail at second class postage rates is pending at Salt Lake City, Utah. Subscription price \$14.00 a year. \$ 1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U. S. A. Subscription information telephone number 801-531-2947.

POSTMASTER: Send address changes to "Seito no Michi" at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U. S. A.

●——もくじ

大管長会メッセージ

主の歩みにならって	エズラ・タフト・ベンソン	3
韓国の開拓者—金浩植	デニー・ロイ	9
ふたりで育てる愛		16
「私はふさわしくありません」	ジョアン・アトキンソン	19
「お前を逮捕する」	ウォルター・H・ホーン	21
すべての生徒を教える	ディクシー・キャスパー・ネルソン	23
モルモンメッセージ		25
もう二度と繰り返すまい	エレイン・ヴォーン	26
家庭訪問メッセージ		
イエスのみもとへ行く		27
理解の賜	F・バートン・ハワード	29
質問に答えられなかった私	クリスティ・ウイリアムズ	36
——若人のために——		
前もって決心する	キャロリン・デブリース	41
チャレンジャー伝道の召し	ジャネット・トーマス	
	ライザ・A・ジョンソン	45

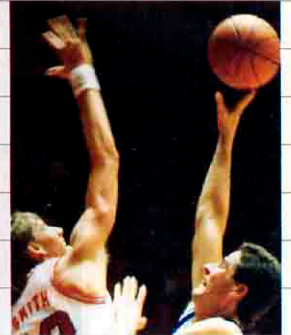
チャーチニュース

子供のページ (別冊付録)

きょうぎとせいやく	2
せいてんをしらべる	4
ジョージ・Q・キャンノン	7
おもちゃばこ	8



表紙：ハイラム・スミスのお机、上に載っているのは、
ジョセフ・スミス直筆の教義と聖約123 - 123章
(左手前)、初版のモルモン経と教義と聖約



大管長会メッセージ

主の歩みにならって

エズラ・タフト・ベンソン

どの時代の子言者も、私たちが生きているこの時代に熱い思いを寄せていました。そして、すでにこの世を去った無数の人々、これから地上に生を受ける人々の目



Robert T. Barrett

も私たちの上に注がれています。今ほど、忠実な人々が強く求められている時代はありません。悪の軍勢と義の軍勢の両方がこれほどに陣容を整えている時代はかつてありませんでした。今は悪の力が猛威を振るっている時代ですが、地上には非常に多くの神権者が存在し、主の力も大いなる勢力となっています。

悪の軍勢と義の軍勢はともに、日々その隊列に新たな人々を迎え入れています。私たちは毎日、みずから擁護する真理を掲げ、数多くの事柄を決定しています。最終的な結果は明らかです。結局は義の軍勢が勝利を取めるのです。私たちに問われているのは、その戦いの中で、自分自身が今また将来どこに身をおき、どのような決定をするかです。皆さんは、終わりの日まで忠実さを貫き、予任による務めを全うすることができるでしょうか。

大いなる戦いは、男女を問わず偉大な英雄を生み出すことがあります。私たちが大義のために今進めているこの戦いは、これから後もしばらく続きますが、自分自身の雄々しさを示す機会としてこれに勝るものはありません。私たちがこれから経験する戦いのいくつかは自分自身の心の中にある静かな部屋の中で行なわれます。

私たちは皆それぞれに自分自身の戦場を持っています。敵の術策は時に応じて様々に変わります。サタンは私たちの弱点を攻撃しようとしてきます。私たちはその狡猾なやり方に対して警戒しなければなりません。彼は、だれの目から見ても明らかな罪悪を犯させようとするだけでなく、これくらいの軽い罪ならという思いを植え付けたり、狡猾な妥協的考えの中に人々を引き込もうとします。

サタンがすべての人を自分と同じみじめな境遇に陥れようと躍起になっていることを忘れないでください。それと同時に、主が私たちを愛し、ご自身が享受しておられる完全な喜びを私たちにも得させたいと望んでおられることを忘れてはなりません。私たちは神とサタンのどちらに仕えるかを自分で選択しなければなりません。

キリストは地上に生を受け、あらゆる種類の誘惑を受けましたが、そのすべての戦いに勝たれました。かつて地上に生を受けた人々の中に、キリストほどすばらしい戦士はほかにいませんでした。キリストは、私たちが内面的な戦いであれ、外的な力との戦いであれ、すべての戦いで勝利が得られるように助けを与えたいと望んでおられます。私たちは時として過ちを犯すことがあります。しかし、悔い改めるなら、キリストの贖いによって神に立ち帰ることができます。

イエスは王国が勝利を取めることをご存じです。そして王国のみならず私たち一人一人が勝利を取めることを望ん

でおられます。またイエスは、敵が私たちや王国に対してどのような策を用いてくるかも、前もってすべてご存じます。祝福師の祝福を祈りの気持ちをもって注意深く読むならば、自分にどのような力が授けられているかを知ることができます。また自分の生活を改められるよう、弱点を示してくださいと神に祈り求めることもできます。主は次のように約束しておられます。

「もし人われに来れば、われはかれにその弱点を認めさせん。見よ、われは人を謙遜にするために人に弱点を与うれど、すべてわが前にへりくだる者には充分わが恵みを授くるにより、かれらがわが前にへりくだりわれを信ずる時にはその弱きを強きに変えん。」(イテル12:27)

力を尽くして義をなす人は、パウロと同じように、「わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができる」(ピリピ4:13)と断言できるのです。ぜひこのことを肝に銘じてください。またパウロが言ったように、私たちが経験する試練で世の常でないものはなく、神は試練とともに逃れる道を備えてくださるといふことも忘れないでください。(Iコリント10:13参照)

主はニーフアイ人に「汝らはいかなる人物にてあるべきか」と問いかけたあとで、みずから次のように答えられました。「まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず。」

(IIIニーフアイ27:27) イエスは3年間人々の間で導きと教えを施すに先立ち、30年間準備をされました。その間のイエスは、どのようなお方だったのででしょうか。新約聖書のルカによる福音書には、次のように書かれています。「イエスはますます知恵が加わり、背たけも伸び、そして神と人から愛された。」(ルカ2:52)

現代の啓示には、次のように書かれています。「されば、彼は始めに完きを受けずして絶えず恩恵に恩恵を加えられ、[罪に恵みをではなく、恵みに恵みを加えられたのです] ついに完きを受けしなり。」(教義と聖約93:13)

私たちも、知恵、背たけ、また神と人から愛されるという点において、恵みに恵みを受けて、成長していく必要があります。

「イエスは知恵が加わり」

知恵とは真実の知識を適切に用いることです。すべての知識が等しい価値を持っているわけではありません。またすべての真理が等しい価値を持っているわけでもありません。私たちが学ぶべき真理の中でもっとも大切なのは、人間の永遠の救いに関する知識です。人はどこから来たのか、またなぜこの世にいるのか、死後どこへ行くことになるのかということを理解しなければ、真に知識ある人というこ

とはできません。また私たちは「あなたがたはキリストをどう思うか」というイエスご自身の問いかけに正しく答えられなければなりません。

この世は、これらの事柄について私たちに教えを与えることはできません。私たちが得なければならない最も重要な知識は、福音とそれを定めたお方すなわちイエス・キリストに関する知識です。それは人の救いにかかわる知識です。

永遠の生命は神から授けられる賜の中でも最大の賜であり、すべての人が熱心に追い求めるべきものです。永遠の生命を得るには、天父と御子イエス・キリストについて知らなければなりません。それについて救い主は次のように言っておられます。「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることです。」(ヨハネ17:3)

神とイエスを知るには、御二方について学び、そのみこ



ころを行なわなければなりません。そうするならば、啓示を通して知識を増し加えられ、忠実に従う人は真理へ導かれていきます。この道を踏み行なう人は、さらに大きな光と喜びを与えられ、最後には神のみもとへ導かれ、神とともに完全な喜びにあずかることができますようになります。

私たちは熱心に「最も善き書より智恵ある言葉を探し求め」(教義と聖約88：118)るように勧告されています。まず調べなければならないのが、聖典であり、予言者、聖見者、啓示を受ける者の言葉がそれに続きます。主は教会の大管長について、「それは彼の言葉は……あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり」(教義と聖約21：5)と言っておられます。



福音の中には、神学の領域に属し、人を救いに導く非常に重大な真理が含まれていますが、他の系統に属する知識も含まれています。主は昔の宣教師たちに、次のような分野においてもさらに知識を身につけるようにと勧告を与えられました。「天にも地にも地の下にも関わりあること、またすでに起りたること、今有ること、近く必ず起らんとすること、また国内に有ること、国外にあること、また戦争、諸国民の葛藤、地上に下る審判、而して国々と王国とに就ける知識などもまた然り。」(教義と聖約88:79)

様々な書物があふれているこの時代にあっては、何を読むべきでないか適切な判断が下せる人こそ真の教養を備えた人ということができます。人気があるからといって、それが価値ある書物とは限りません。1冊良い本を書いたからといって、その著者の作品がすべて読むに値するとは限りません。多くの小説をはじめ、昨今の出版物の中には、道徳観を低下させ、真理を歪曲するような物が数多くあります。

職業に役立つ技術、自分の手を用いて何かを成し遂げる能力を身につけるのは有益なことです。日々の生活を営むうえで最も大切な技術、知識は、自分と家族の衣食住の必要をまかなうために手と頭脳を働かせる能力です。

「イエスは背だけも伸び」

肉体的な面での健康が霊に影響を及ぼすのは疑いない事実です。だからこそ、主は知恵の言葉を啓示されたのです。神が俗世にかかわる戒めを授けられたことは一度もありません。神の戒めは私たちの肉体と霊の両方に影響を与えるものなのです。私たちの健康、肉体的な成長に影響を与える基本的な事柄が少なくとも4つあります。

第1は正しい生活です。罪は私たちを弱めます。罪は霊だけでなく肉体にも悪影響を及ぼします。聖典には正しい生活をする人には肉体的な力が伴うことを示す事例が数多く載せられています。一方、罪を悔い改めない人は、精神的にも肉体的にも病に侵されていきます。不従順な生活が直接の原因となって病気や不慮の死が引き起こされる場合もあります。イエスはある人の病を癒したあとで、次のように言われました。「もう罪を犯してはいけない。何かもっと悪いことが、あなたの身に起るかも知れないから。」(ヨハネ5:14)

第2は食べ物です。私たちの健康状態は主に何を食べるかによって決まります。ほとんどの教会員は茶、コーヒー、たばこ、アルコールなど知恵の言葉で禁じられている物については知っています。しかし、野菜、果物、穀類の必要性といった積極的な面をさらに強調しなければなりません。

私たちはさらに健康的な食生活をする必要があります。

第3は体を動かすことです。私たちの肉体は運動を通して活気づけられなければなりません。

きれいな空気を吸いながら散歩をするのも肉体を活気づけるのに役立ちます。適切な指導のもとに行なうなら、ランニングも健康に良いものです。簡単なスポーツでもよいでしょう。

第4は睡眠です。早く床に就き、適度な睡眠時間を取るのには、最高の健康法です。主は、「度を過ぎて眠るを止めよ。早く臥床に入りて疲れを休めよ。朝は早く起きて汝の肉体と精神とを活気付けよ」(教義と聖約88:124)と言っておられます。早寝早起きは今もなお良い勧告として生きています。

「イエスは神と人から愛された」

どうしたらさらに豊かに神の愛を受けることができるでしょうか。私たちの人生の目的のひとつは、「神の命じたまわんすべてのこと」(アブラハム3:25)をなすかどうか試しを受けることです。つまり、私たちは主のみこころを学び、それを行なわなければならないのです。そして、イエス・キリストの模範に従い、キリストに似た者とならなければなりません。

★「主よ、私に何をしようにのぞんでおられるのですか」(欽定訳使徒9:6)というパウロの言葉は、私たちの人生にとって重要な意味を持つ、深く考えなければならない問いかけです。神のみこころを知るための源としては、次の3つがあります。

1. 聖典。予言者ジョセフは、特にモルモン経について、「人はその教えに従うことにより、ほかのどの書物にも増して神に近づくことができる」(「教会歴史」4:461)と言っています。

2. 主に油注がれた人々が靈感を受けて語る言葉、また予言者、聖見者、啓示を受ける者の勧告。地元の教会指導者も、自分の管理下にある人々について靈感による導きを受ける権利があります。

3. 主のみたま。世の人々にもキリストの光が導き手として与えられていますが、私たち教会員は聖霊の賜を受けられています。日々の生活の中で聖霊の導きを豊かに受けるためには、そのための霊的なパイプをきれいにしておかなければなりません。パイプがきれいであればあるほど、神のメッセージを受けやすくなります。そして主のささやきが多く与えられ、それによく従えば従うほど、喜びも大きなものとなっていきます。もしこのパイプが罪で汚れていると、悪魔のささやきを神の導きと取り違えてしまうこ

ともあります。

神の愛をさらに豊かに受けるための方法としては、毎日の聖典の学習、朝昼夕の個人的な祈りなどがあります。私たちは家族、教会、国家の中で働くことによって、御父の子供たちに奉仕しなければなりません。

神はすべての良い事柄に対して、時と順序と季節を定めおられます。ふさわしい年齢に達した人は、結婚や教育に優先して伝道について考えなければなりません。また、心身ともに成熟し、ふさわしい相手を見つけた人は学業を理由に結婚を延ばしたりすべきではありません。伝道、教育、結婚、どれもみな大切なものですが、それぞれにふさわしい時があるのです。

私たちは、常にキリストを忘れず、神から与えられた戒めを守り、キリストに従う人をさらに多く必要としています。成功の度合を計るためのもっとも良い尺度は、どれほど忠実に主の歩みに従っているかを見ることです。

「イエスは人から愛された」

同胞に祝福をもたらすには、強い宣教師、強い父親、母親になるのが一番です。世の問題の種となるような子供ではなく、むしろ解決の助けとなるような正しい子供を育てることで。

私たちがなすべきもっとも大切な働きは、家庭という囲いの中にあると教えられています。またいかなる国家もその国民が作る家庭以上には強くなり得ないというのも真理です。男性にとって、主の宮居で結婚し、自分の家庭を治め、正しい父親として家庭に祝福を与える責任ほど偉大な召しはありません。神でさえも、「天の父よ」との私たちの呼びかけを喜ばれるのです。女性にとって最も貴い召しは、主の宮居で結婚し、子供を立派に育てる正しい母親となることです。

ある人がこう言いました。「幸福な人とは、自分の信ずるもの、妻、仕事を見だし、その3つを愛する人。」生活の中における宗教の役割について考えるとき、私たちは末日聖徒イエス・キリスト教会は唯一真の教会であるという確信を持つことができます。その確信を得るためには、モルモン経を読んで、モロナイの勧告に従うだけでよいのです。

「またこの記録を受ける時、それが真実なものかどうかをキリストの御名によって永遠の父なる神に問え。もし誠心誠意でその上キリストを信じながら問うならば、神は聖霊の力によってこの記録が確なものであることをあなたたちに示したもうにちがいない。」(モロナイ10:4)

モルモン経が真実なら、ジョセフ・スミスは予言者です。ジョセフ・スミスが予言者なら、そのみ手の道具としてた

てられた教会、すなわち、末日聖徒イエス・キリスト教会は真実の教会です。また真実の教会であるなら、それを導く神の予言者がいるはずで。

愛する兄弟姉妹の皆さん、イエスは知恵を加えられ、背たけも伸び、神と人から愛されましたが、私たち自身もそうなることができます。皆さんが私たちの導き手イエス・キリストに従い、精神的にも、肉体的にも、また霊的にも社会的な面でも成長されるように願っています。□

*アイダホ州レックスバーグのリックスカレッジにおける講話より

ホームティーチャーへの提案

強調点：ホームティーチングのときに、以下の点について話し合うとよいでしょう。

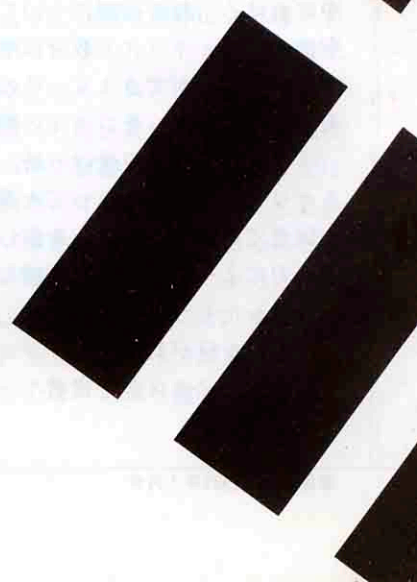
1. 人生最大の戦いは私たちの心の中の静かな部屋で行なわれる。
2. 主はあらゆる種類の誘惑を受けたが、そのすべての戦いに勝たれた。イエスは誘惑や弱さを克服する方法だけでなく、私たちの長所や短所もご存じである。主は私たちが勝利を得られるように、個人的な啓示を通して導きを与えてくださる。
3. この世で勝利を取めるための確実な道は、イエスの歩みにならい、イエスと同じように4つの分野において成長していくことである。
 - a. さらに知恵を加える一知恵とは知識を適切に用いることである。
 - b. さらに健康管理に留意する。
 - c. さらに神に愛される人間となる一人生の各時期において主から何を求められているかを知ることができるよう、主に近づこうと努力をする人は、さらに豊かに神の愛を受けることができる。
 - d. さらに人々に愛されるようになる一私たちは互いの絆を強めることによって、人々が日々の生活の中で福音の大切さをよく理解できるよう助けることができる。

話し合いを進めるために

1. イエスの歩みにならうということについて、自分の考えを述べる。
2. このメッセージの中に家族で読んだり話し合ったりするのによい聖句や言葉はないだろうか。
3. 話し合いをより充実したものとするために、訪問する前に家長と話し合っておいた方がよいだろうか。監督や定員会指導者からのメッセージはないだろうか。



金浩植兄弟は、アメリカ軍の基地に招かれ、韓国の人々に福音を教える手助けをした。



韓国の開拓者

金 浩植 —
キム・ホジク

デニー・ロイ

金
浩
植

末日聖徒は、福音が末日に世界中に広まることを啓示
や予言を通して知っています。しかし、韓国において
み業がどのように進められてきたかはあまり知られてい
ません。1951年まで韓国には末日聖徒イエス・キリスト教
会の会員はひとりもいませんでしたが、今日では、韓国に
は14のステーク部があり、神殿も建っています。

しかし、このすばらしい発展の陰には、現代の開拓者とも
言うべき金浩植兄弟の働きと影響があったことを忘れて
はなりません。

1905年4月16日、^{ピョンアンブクト}平安北道（現在は北朝鮮領）に生まれ
た金浩植兄弟は、十代のとき、ソウルの南にある田園の町、^{スリョン}水原の学校に入るため南に引っ越してきました。彼は1924
年に水原高等農林学校を卒業し、その後、日本の東北大学
で生物学の学位を取得し、1930年に卒業しました。高等教育
を積んだ彼には、出世の道が開かれていました。帰国後、^{スクミオン}彼は淑明女子大学の学長になり、1946年には水原農業試験
場長に任じられました。

元同僚で、現在はソウルにある漢陽大学の学長をしている
^{キムヨンジエン}金蓮俊氏は、当時を回想して、「彼が一番心にかけてい

たのは、韓国人の生活水準の向上ということでした」と語っています。金浩植兄弟は、韓国人の栄養状態を改善することを自分の研究のテーマにしていました。

しかし、彼には、農学上の最新の理論や発見についてもっと学びたいという強い望みがありました。試験場で一緒に働いていたアメリカ人の研究者は、韓国には科学や教育の分野で立派な教育を受けた指導者が必要だと言って、ぜひそうするようにと励ましてくれました。李承晩大統領も彼をアメリカに派遣し、国民の食生活改善のための効果的な方策を学んでこさせたいと思っていました。そこで金浩植は、栄養学では世界のトップクラスの研究プログラムを持つ、ニューヨーク州のコーネル大学に入学する計画を立てました。

1949年に合衆国に向けて旅立ったとき、彼の心の中にあっただのは、教育への強い願望だけではありませんでした。若いころから彼は宗教に関心を示し、いくつかの教会の教えを勉強していましたが、彼の霊的な飢えを満たしてくれるところはありませんでした。少年のころには、様々な宗教運動に首をつっ込んだり、お寺に行って研究もしました。1925年にはプロテスタントの教会に加入し、長老になっています。

韓国の初期の改宗者で、現在、ソウルにある地区管理本部の地区監督韓仁相兄弟はこのように回想しています。「金博士は、イエス・キリストが救い主であるといった正統的な教えは強く信じておられました。しかし、プロテスタント教会のそのほかの面、たとえば神学上の混乱や、運命予定説のような誤った教義にはかなり不満を持っておられたようです。」1935年の三男の突然の死により、彼の真理への渴望はますます深まりました。

みたまの勧め

アメリカに渡るずっと以前から、彼は神のみたまを信じ、その導きを求めていました。彼のそうした信仰は、故国を離れる直前にずいぶん役に立ちました。そのとき、彼は立派な自宅も、車も、その他の持ち物も売らなければいけないように感じたのです。これらの処分によって得た現金は、妻子に生活費として渡しました。このどう見ても向

う見ずとしか言えない行為を批判する人もいましたが、彼はそのような人に対して、自分はみたまの勧めに従っているだけだと答えました。

アメリカに着いて数カ月後にその理由がはっきりしました。1950年6月、北朝鮮の侵入により戦争が始まったのです。爆撃で彼の元の家は破壊され、南の政府によって車という車は全部、軍用に徴収されてしまいました。金浩植の家族は、彼の留守の間も経済的に困ることなく生活することができました。

みたまの助けによってアメリカ滞在中に「真の教会」を見つけれればと願っていた金浩植は、コーネル大学で博士号を取るまでの間、ニューヨーク州イサカ周辺にある様々な教会の集会に出席しました。ところが、求めていた答えはごく身近なところにあったのです。

この韓国人の教育者は、生理学の博士号取得をめざしているオリバー・ウェイマン兄弟と同じ研究室を使っていた。ウェイマン兄弟も彼と同じでほかの多くの大学院生よりは年を取っていました。それに、末日聖徒でもありました。

ふたりは意気投合し、いろいろなことについて討論しましたが、宗教のことは話題にしませんでした。金兄弟がウェイマン兄弟に、教会について書いたものを持っていないかどうか聞いたのは、ウェイマン兄弟がコーネル大学を離れる日の前日でした。

金浩植はウェイマン兄弟に言いました。「君が酒やたばこを口にしてる姿を見たことがない。下品な言葉も口にしないし、神の名を汚すような言葉も耳にしたことがない。人一倍熱心に、長時間研究しているのに、日曜日にはここにいない。君はいろんな点で違っている。なぜなのか教えてもらえないだろうか。」

そこでウェイマン兄弟は、ジェームズ・E・タルメージ長老が書いた「信仰箇条の研究」を渡しました。金浩植はそれを1週間とたたないうちに読んでしまいました。「彼は、今まで読んだ福音に関する本の中でこれが一番よい、完全に信じる、と言ったんです」とウェイマン兄弟は当時を述懐します。モルモン経を渡すと、それもまたたく間に読み終えて、これが神の言葉であると信じると報告してく

金浩植

る有様でした。モルモン経は聖書よりももっと完全で、理解しやすいと言うことでした。

わが同胞のために

末日聖徒の教義に好意的な反応を示しながらも、金浩植はまだ自分の所属するプロテスタント教会が、末日聖徒の教えを一部取り入れることによって内部から改革できるのではないかと考えていました。地元の末日聖徒の支部に通うようになりましたが、プロテスタントの集会にも引き続き出席していました。

コーネル大学での最後の日を迎え、ウェイマン兄弟が友人たちに別れを告げていると、金浩植が近づいてきました。ウェイマン兄弟は強く感じるものがあって、なぜ故国を離れ、家族を置いて合衆国で勉学する決心をしたのか尋ねました。金兄弟の答えはこうでした。「わが同胞のために、コーネル大学で得られる新しい栄養学の知識が必要だったからです。」

ウェイマン兄弟はこのように語っています。

「私は自分の証を述べ……『私の個人的な考えですが』と断わってから、彼がアメリカへ来たのは主の導きによるのではないかと言いました。……彼がアメリカへ来たのは、福音を受け入れ、韓国へ帰ってから人々に神の教えを伝える偉大なみ業に備えるためではないかと考えていたのです。……そして……もし彼がその主のみこころを受け入れないならば、ほかの人が代わりに立てられるだろうと話しました。」

ウェイマン兄弟はその後、一度も金兄弟に会っていませんが、ニューヨークを離れるときのことをこう語っています。「彼に証をしたときに感じたみたまが、同時に彼の心をも動かしたという確信がありました。私は彼の表情が変わるのを見たのです。」

その時、金兄弟の考えは一変しました。そして相変わらず貪るように福音の勉強を続けながら、バプテスマを受けることを考えるようになりました。彼に教えたセネカ地方部の宣教師、ドン・Cとジニール・ウッドは当時を思い出してこう語っています。「私たちが金兄弟と復習のようなことを始めると、途端に彼は手を上げ、強い調子で『それは

とっくに聞きました。次へ進みましょう』と言うのです。」

知恵の言葉のレッスンはとりわけ早い反応を示しました。ウッド長老が教義と聖約の89章を読み終えると、涙が金兄弟のほおをつたいました。

金兄弟はむせび泣きながら言いました。「アメリカへ来たばかりのときに、この教えを知らされていたらどんなによかったことかと思います。私は政府から国民の食生活向上の方策を見つけるようにと要請されていましたが、家畜を飼う十分な牧草地もない我が国では、どうしたらそれができるか、まったく答えが見つかりませんでした。私はそのためにアメリカでずっと穀物について研究してきましたが、主も私たちに穀物を用いるように望んでおられたのですね。」金兄弟は主の健康の律法を心から受け入れました。

宣教師のレッスンの終わるころには、教会に入る準備ができていたばかりか、ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリがバプテスマを受けたのと同じ場所で、自分もバプテスマを受けたいと思っていました。1951年7月29日、回復された教会での最初のバプテスマを記念する碑の近くを流れるサスケハナ川で、セネカ支部の支部長、ジョセフ・A・

ダイ兄弟は彼にバプテスマを施しました。これが韓国人最初のバプテスマでした。水から上がったとき、金兄弟は「わたしの羊を養いなさい。わたしの羊を養いなさい」という声を聞いたということです。金兄弟はあとでこの出来事を聖典の第1ページに記し、バプテスマの日付の下に、「与えられた言葉—わたしの羊を養いなさい」と書きました。

予言者との握手

1951年9月、博士課程を修了して韓国に帰る数日前に、金兄弟はウッド兄弟姉妹と共に、クモラの丘で行なわれる野外劇を見に行きました。日曜日に、彼らは「聖なる森」で地元の宣教師のために開かれた特別な証会に出席しました。証会の後、金兄弟はその会に出席していたデビッド・O・マッケイ大管長に会いました。そのときの様子を、ウッド兄弟はこう語っています。「私たちが森から出てくるとき、金兄弟は左手で右手をかばうようにし、涙でほおをぬらしたまま、『私は神の予言者と握手をした』と言い続けていました。」

「聖なる森」からはるか遠く離れた金兄弟の母国は、今や戦争で破壊し尽されていきました。何十万人という人々が命を失い、都市や工場はがれきと化し、人々の暮らしは荒れすさび、腹をすかせた難民たちが一時しのぎのあばら屋に住んでいました。金兄弟が羊を養うという主の用向きを引き受けたのは、実にこのような状態のときでした。しかし、何の助けもなく、この大変な仕事に立ち向かったわけではありません。

当時、韓国の各地の基地では、そこに勤務するアメリカの末日聖徒の軍人たちによって、集会が開かれ、教会の正式な組織に準ずるものができていました。金兄弟はこれらの集会に出席するとともに、自分自身の伝道活動を始めました。宣教師として働いた経験がある軍人たちに、自分の家族を教えるように頼みました。彼らは英語で教え、それを金兄弟が通訳しました。金兄弟はまた、この宣教師たちと一緒にあって求道者を探しました。こうして1952年の7月には、軍人とは別に、自分たちの日曜学校を開ける

だけの韓国人の求道者を教えるまでにいたりしました。

教え子のひとりがひどくふさぎこんで、自殺しようとしていると打ち明けてきたとき、金兄弟はこう言って聞かせたそうです。

「姉妹、私は福音を知っています。素晴らしい福音です。あなたに新しい希望、新しい命を与えてくれます。もしあなたがこれを勉強し、神様にお祈りするなら、必ず健康と、幸福と、喜びが与えられます。そして、ほかの人々にもその幸せを分けてあげたいという希望さえわいてきます。」この女性は自分の娘と一緒に、1952年8月3日、釜山^{ソングド}の松島海岸で、バプテスマを受けました。これは韓国で行なわれた最初のバプテスマ会です。このとき、バプテスマを受けた人がほかにもふたりいました。金兄弟の息子の金泰環^{キムテウワン}と娘の金永淑^{キムヤンスク}です。

長女の金貞淑^{キムジュンスク}は1953年に、水管軍駐屯地のプールでバプテスマを受けました。彼女はその時のことについて、「とても寒い日でしたが、水は温かでした。うれしさと寒さなんて全然感じませんでした」と言っています。

金兄弟は毎週、自宅に求道者を招いて福音のレッスンをしました。アメリカ人の教会員と求道者の間に立って通訳をし、ときにはみずから求道者に教えることもありました。この集会に何度か出席したある韓国人は、金兄弟が何度も、「この戦争で分断された国に最も必要なことは、魂の回復である」と語るのを耳にしました。

「私は神に求めた」

韓国人の改宗者数が次第に増加していく一方で、金兄弟は仕事の面でも成功を得ました。戦争のため閉鎖状態になっていた、釜山にある国立水産大学の学長に迎えられたの

写真

中央：ハロルド・B・リー長老

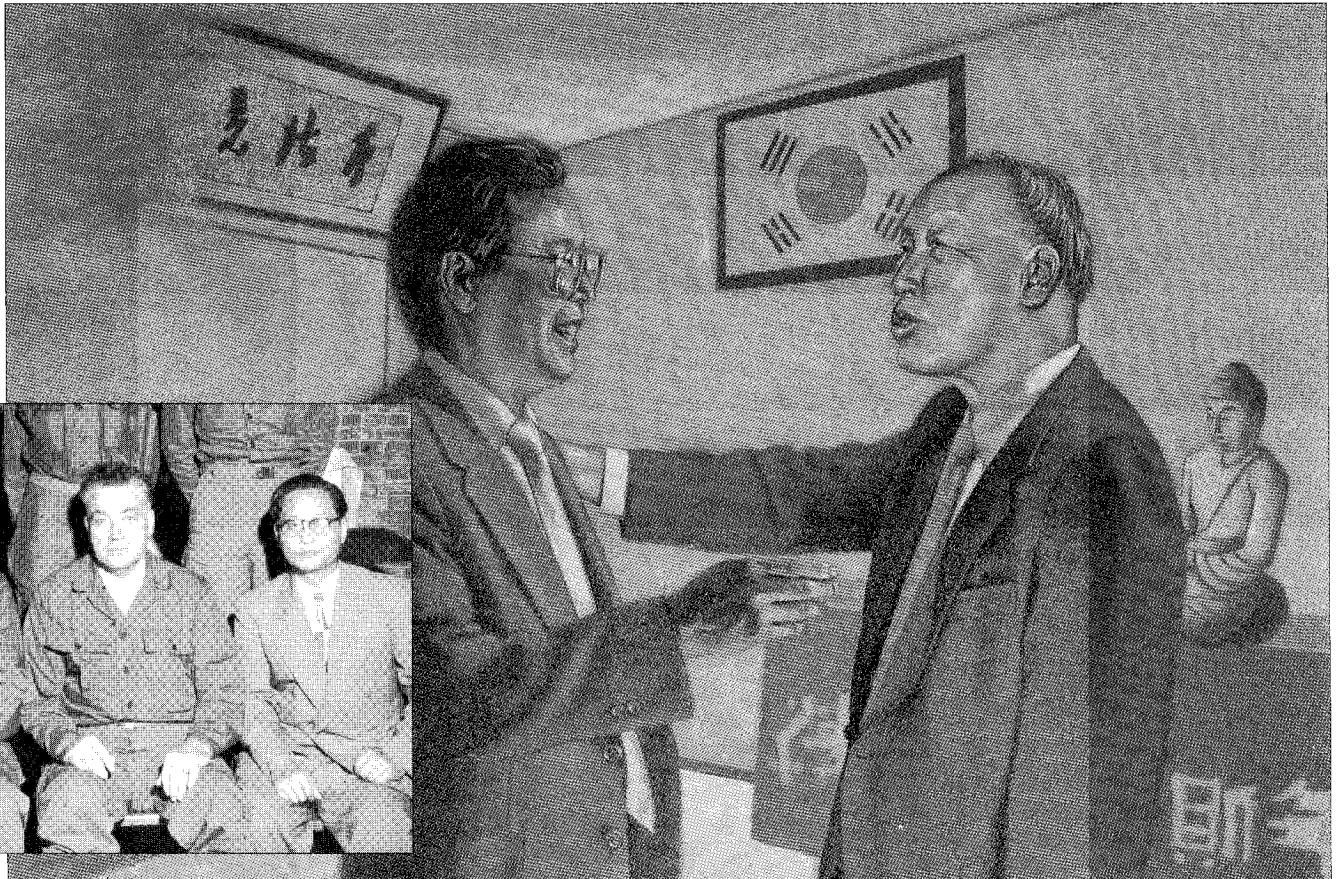
(当時、十二使徒定員会会員)

左：ヒルトン・ロバートソン長老

(当時、北部極東伝道部伝道部長)

右：金浩植兄弟

金 浩 植



です。金兄弟はわずか数カ月のうちに大学の機能を完全に立て直し、多くの人々が驚くほどの成果を上げました。その栄誉をたたえる祝いの席で、金兄弟は集まった両親や教師を前にこう語りました。「私はいささかの名誉もいただくわけにはまいりません。私は神に求めました。神こそこの信じ難い業を成し遂げられたお方なのです。」

恵まれた指導力に、神の助けを求めるといふ謙虚さがあり、金兄弟は異例の速さで昇進していきました。建國大学畜産学部学部長、弘益大学^{ホンイク}学長、ユネスコ〔国際連合教育科学文化機構〕の韓国首席代表、ソウル教育長、文部次官などを歴任し、数冊著わした科学書も高い評価を得ています。

金浩植が社会的に高い地位を得たことは、大きな意義を持っています。韓兄弟はこう語ります。「韓国での教会の確立には、このような政治的にも、社会的にも有力な人物がぜひとも必要だったのです。金博士がいらっしゃらなかったら、韓国の教会の発展は2、30年は遅れていたでしょうね。」

確かに、当時の状況を考えれば末日聖徒イエス・キリスト教会が法的に認められるなどということは、とても無理だったのです。「モルモンという名前が異教とか、邪教という言葉の代名詞として使われていましたから」と韓兄弟は言います。末日聖徒の宣教師は、「好ましいキリスト教の宣教師として認められていなかった」ため、韓国での教会の活動は許されていませんでした。

そのような状況下で、金兄弟が1956年にソウル教育委員に任命されたことは幸運でした。あらゆる都市の宗教問題がその委員会の管轄下にあったからです。金兄弟はみずから教会の法人設立の提案を委員会に送り、彼の承認によってその提案は通過しました。「まさに奇跡でした」と韓兄弟は語ります。

金浩植はまた、自分の信用をかけて、末日聖徒の宣教師が韓国に入国する許可を得、彼らの金銭上のスポンサーになることに同意し、宣教師は韓国の人々に何ら危害を加えないと保証しました。こうして最初のふたりの宣教師が1956年4月に、日本から送られて来ました。

伝道に与えた影響

金兄弟が韓国人聖徒の最初の世代に及ぼした影響には、その重要性において、伝道活動に与えた影響に勝るとも劣らないものがあります。韓国伝道部の元伝道部長であり、韓国人として初めて地区代表を務めた韓兄弟は、高校生のときに教会に入りました。1956年に、韓兄弟は、金兄弟が日曜学校を教えている支部に出席するようになりました。韓兄弟は当時を思い出してこのように語ります。「金博士は韓国のすべての聖徒にとって族長のような人であり、霊の指導者でした。その完成された人格は、新会員や求道者の大きな力でした。金博士がこの原則を受け入れるというのですから、彼の正直で誠実な人柄を知っているわたしたちには、何の心配もありませんでした。」

また金博士は文部次官の身でありながら、私たち十代の若者と交わりました。韓国の社会ではそのようなことは、とても考えられないことでした。まさか政府の要職にある人が一般市民に親しく話しかけるなんて、ましてや私たちのような年端もゆかない貧乏学生と、というわけです。しかし金博士は、年齢、人種、地位、肩書き、などにとられることなく、福音で結ばれた兄弟たちと共にいることを恥ともしませんでした。」

韓国人改宗者の多くが高校生や大学生だったこともあって、金博士と若者たちとの親しい関係は大切なものとなりました。韓兄弟と同じく初期の改宗者で、伝道部長や地区代表を務めた季虎^{ヘンタク}男兄弟は、「金博士は、これらの若い、韓国における神の王国の将来の指導者となる人々を教えるために全力を尽くしました」と語っています。

教え子たちによれば、金兄弟の最高の教えは模範によるものでした。韓兄弟は語ります。「韓国の社会は戦争後、急速にすすんでいきました。当時は公共の輸送機関はほとんどなかったので、毎日歩いて家に帰ったものです。途中、目に入ってくる半ば壊れかかった家々からは、お腹をすかした妻と酒に酔った夫の派手な言い争いが聞こえてきました。しかし、金博士は天国のような生活をしておられました。奥さんや家族への接し方は実にすばらしいものでした。」

金兄弟は韓国人聖徒にこう語ったことがあります。「私は自分の命や、お金や、肩書きを捨てることを決まっていとい

金浩植

ません。救い主と共にいられさえすればそれでよいのです。」これを聞いて、「それは、建て前だ」と言う人がいるかもしれません。しかし、彼の生涯は、神に仕えるという堅い決意を証明して余りあります。

たとえば、一度、韓国放送公社が金兄弟に、全国放送の中で生物学を話題に講演をするように依頼したことがありました。そのときのことについて、地区管理本部で働いている朴在岩兄弟はこう言っています。「出演している10分の間、金兄弟は教会のことばかり話していました。まるで日曜学校のクラスで話しているようでしたよ。」

勇気ある発言

金兄弟はまた、信仰への献身ぶりを示すすばらしいエピソードを残しています。それはまるでダニエル書の中の物語のようです。李承晩大統領がある日曜日に、至急、文部次官と話し合う必要があると考えました。大統領秘書官は数時間捜しまわった末、やっと金浩植が日曜学校のクラスで教えているところを捜し当てました。ところが、金兄弟はレッスンは終わるまでは行けないと断ったのです。厳格なことで有名な李大統領は激昂しました。それでも金兄弟は、日曜学校で教える責任ほど重要なものはなく、大統領の呼出しに応じる前にその務めを果たす義務があると考えていることを、穏やかに説明しました。すると李大統領は金兄弟の肩を軽くたたいて、「よく言った」と言ったそうです。

金兄弟は教会のためにもっと時間と精力を捧げたいと考えて、1956年7月に文部次官を辞任しました。金兄弟は有樂洞支部の支部長をし、1955年には最初の韓国地方部長に召されて、亡くなるまでその職にありました。彼の働きの中には、いくつかの教会出版物を英語から韓国語に翻訳したこともあります。

1959年8月に、インドで開かれた国際連合食糧農業機構の会議に、金兄弟は韓国を代表して出席しました。帰国後まもなく、彼は季虎男兄弟と会いました。そのとき季兄弟が「お疲れのようですね」と言うと、「会議の途でずっと気分が悪くて、家に帰ることばかり考えていたよ」という返事でした。それから1カ月とたたない8月31日に、金兄弟

は卒中で亡くなりました。

金兄弟の葬儀には、韓国のほぼすべての大学の学長が参列し、敬意を表わしました。1950年代後半に韓国で伝道し、後に伝道部長になったF・レイ・ホーキンズ兄弟は次のように言っています。「その学長たちは、金兄弟から教会に誘われたり、福音について語り合ったことが度々あったと、口をそろえて話していました。」ホーキンズ兄弟の言葉はエリートたちの中で生活しながら、金兄弟が常に神の王国建設を第一に考えていたことを物語っています。

彼の教会での奉仕はわずか8年の短いものでしたが、韓国における教会の発展には計り知れない影響を与えました。金浩植は、新しいタイプのモルモンの開拓者の模範でした。彼は、「モルモン」という言葉も末日聖徒イエス・キリスト教会という名前もまだ知られていなかった国に福音を招き入れたのです。□

*デニー・ロイ：アメリカ人の手話通訳者。シカゴ・ハイツ・イリノイスターキ部ハイパークワード部所属。シカゴ大学で政治学の博士号をめざして勉学中。

ふたりで育てる愛

夫婦の互いに異なる個性がひとつになって、
美しい永遠の最高傑作が生まれるのです。

結 婚して19年間、キャサリーンとクレイグは9人のかわいい子供たちに恵まれました。しかし、夫のクレイグは経済面でも職業面でも幾多の困難に遭遇し、妻のキャサリーンは健康を害することもありました。さらに家庭の外でも、ふたりは限られた時間でますます多くの責任を果たさなくてはなりません。そうするうちに、だんだんとストレスがたまり、キャサリーンは次のような言葉を口にしたり、考えたりするようになっていました。「たぶん私たちは、お互いにふさわしい相手ではないんだわ。」

また、夜ふたりで一緒に外出しても、共通点がありません。たとえば、クレイグが映画を見たいとき、キャサリーンは神殿へ行きたいと思うし、キャサリーンがダンスかコンサートへ行きたがる時にはクレイグはサッカーなどの試合を見たがるという具合でした。

ある日クレイグはキャサリーンと同じように次の言葉を口にしました。「たぶんぼくたちはお互いにふさわしい相手じゃないんだ。」クレイグは自分自身がそうってしまったことを気に病み、次の2、3日断食して、夫婦の関係や今感じている欲求不満について祈りました。

そしてある晩、彼はこう言ったのです。「ぼくたちは、色にたとえると、赤や黄色や青のような原色なんだ。つまり、ふたりの間には、すばらしい結婚生活を築き、永遠の家族を作るために必要なあらゆるものが^も見^もわって^もいて、ふたりを合わせると完全なものができあがるんだ。ちょうど3つの原色を調合すればどんな色でもできるように、天のお父さまの助けをいただいて、ふたりがお互いに持っているも

のを合わせれば、幸福な永遠の結婚生活を築くことができるよ。」

キャサリーンはクレイグの言葉を聞いて、お互いの違いを新たな観点から見ることができるようになりました。家族の中で、クレイグは愛の光を周囲に照らす人でした。彼女もそうしたかったので、そのようなクレイグの才能をときどきうらやましく思うことがありました。キャサリーンも、人を愛する気持ちを十分に持っているのですが、なかなか上手にその気持ちを表現することができなかったのです。キャサリーンは一度クレイグに、愛情を上手に表現できないことが悲しいと話したことがありました。すると彼はこう答えました。「でも君は、家族の霊性を高めてくれているじゃないか。聖典を読んだり、大会の説教を聞いたりするのが好きだし、いつも学んだことを熱心に教えてくれるものね。」そのとき突然、キャサリーンは自分とクレイグが互いに助け合って子供たちを育てているということに悟りました。クレイグは妻のキャサリーンに愛情の表わし方を教え、キャサリーンは夫のクレイグに聖典や予言者から学んだことを教えていたのです。

毎日の仕事に追われていると、クレイグが少し手を休めて息抜きをするようにとってくれるのが、キャサリーンにはありがたく思えるのでした。また、クレイグが子供たちの仕事を手伝いすぎると思われるときには、キャサリーンがあまり甘やかさない方がいいのではと意見を言うと、彼は快く耳を傾けます。また、いろいろなことをふたりでするのがだんだん楽しくなってきました。ときにはク





レイグの好きなテレビを、ときにはキャサリーンの好きな読書を、一緒に楽しめます。

そのうちに、ふたりの間には共通点もたくさんあることがわかってきました。スーパーへ買い物に行くのがふたりとも嫌いなこともそうですが、大切なのは、長い散歩、子供たち、教会、清潔な家、焼きたてのパン、そしてお互いが、好きだということです。キャサリーンは話すことが好きでクレイグは聞くことが好きです。キャサリーンは言行一致、根気があり、責任感が強く、自分で決めたことを貫き通します。クレイグは親切で、寛容、忍耐強く、決断力があります。また、ふたりとも、正直、誠実で、昇栄という永遠の目標に向かって熱心に一致して進んでいました。

ある朝早く、キャサリーンが神殿の日の栄の部屋に座っていると、このような考えが浮かんできました。ふたりはこの部屋のシャンデリアについている水晶のプリズムのようなものだ。プリズムは受けた光をキラキラと輝く7色の虹に変える働きをしています。そのようにふたりが愛し

合うならば、お互いに持っている相違点が皆ひとつに溶け合い、末長く永遠に続く美しい絆ができあがるのです。

もうひとつわかったことは、夫婦が一致するには自己憐憫、怒り、利己心に身を任せてはならないということです。両方ともあきらめてしまわない限り、(ひとりが失敗しそうになるともうひとりが助け船を出し、また、ひとりが落胆するともうひとりが手を貸すという具合にお互いに助け合うことができます) 素晴らしい結婚生活を築くことができるのです。

ふたりが力を合わせれば、その夢を実現するための道が開けてきます。夫婦には自分たちの結婚生活と家族を築きあげる共同の責任があります。その責任を果たし終えたとき、夫婦の作りあげた作品そのものがふたりに報いとして与えられるのです。つまり、いかに美しい作品を作るか否かは、私たち夫婦次第なのです。□

「私はふさわしくありません」

ジョアン・アトキンソン

25年前のある日のことです。私は家でアイロンをかけた^り、子供たちの世話を^{して}忙しく働いていました。横目でテレビを見ながら、たばこを吸っていると、玄関のベルが鳴りました。出てみると、^{ほほえ}微笑みを浮かべた背広姿の男の人がふたり立っていて、そのひとりが、ワード部の監督であると言って自己紹介をしました。

ふたりを招き入れると、私は10歳のときにバプテスマを受けて以来、あまり活発ではなく、福音については何も知らないことを早口で説明しました。その2、3カ月前に、私は教会の集会に出席し、出席簿に名前を書き込みましたが、私に話しかけた人はひとりもいませんでした。

監督は私の目を見て微笑み、こう言いました。「実は、若い女性の教師が見つかるようにと祈っておりました。そうしたら、主は私をここへ導いてくださったのです。」私は気でも違ったのではないですかと言うと、監督は微笑みを絶やさずに、持ってきたテキストを開き、クラスでのレッスンについて説明し始めました。

私はこう言いました。「どういうことなのか、さっぱりわかりません。私はたばこも吸うし、お酒も飲みます。16歳の少女たちを教えるなんて、とてもできません。」

すると監督は、次の水曜日からレッスンが始まると説明しました。私は断わり続けましたが、監督は微笑んでいるばかりでした。「私は不活発です」と言う^と、彼はこう言いました。「今まではね。」

「たばこを吸っています。」すると監督は、「来週の水曜日までにはまだ時間がありますよ。神様は姉妹を愛しておられます。きっとできますよ」と言って、テキストを置いて、帰ってしまいました。

私は啞然としてしまいました。それから、怒りが込み上げ、あたりに怒鳴り散らしていました。「ほかの人を探してよ。行くもんですか。」

私はテキストなど見るまいと思いましたが、好奇心にかられてつい見てしまいました。そして、とうとう最初から最後まで、12課のレッスンを全部読んでしまいました。水曜日が次第に近づいてきます。レッスンはすっかり丸暗記してしまいました。水曜日になりました。朝からずっと教会には行かないと言い続けていましたが、約束の時間になると教会に来ていました。そしてあまりの恐ろしさに震えが止

まりませんでした。私はスラム街で育ち、不良グループのいざごは日常茶飯事で、食べるためにはけんかもし、飲んだくれの父親を刑務所から保釈^{する}ために苦勞したこともあり^{ました}。また、非行少女の更生施設で過ごしたこともあり^{ました}。ですから、どんなことにもへこたれない私でしたが、監督のお陰で今は、窮地に陥っているのです。

「いいわ、きっとやり遂げてみせる」と思いました。気がつくともう私は礼拝堂に座って、新しいローレルクラスの教師として紹介されていました。

教室では、ふたりの天使のような少女を前にして、一語一語テキストに書いてある通りにレッスンをしました。『生徒に質問する』という指示の文句さえ、そのまま口に出して言ったほどです。クラスが終わるや、私は家へ跳んで帰って泣きました。

数日後、玄関のベルが鳴りました。「ああ、よかった。またあの笑顔の監督がテキストを返してもらいに来たんだわ」と思いました。ところが玄関に立っていたのは監督ではなく、あのふたりのローレルの少女でした。ひとりはお花を持って、もうひとりはお花を持って。ふたりは中に入ると、私にいろいろなことを教えてくれました。ワード部の人たちのこと、若い女性プログラムのこと、クラスのこと、クラスの生徒は16人いるが、数カ月間教師がいなかったことなど。活発なローレルは、ライラとロイスのふたりだけだったのです。

私はふたりの少女が好きになり、次の日曜日に一緒に教会へ行くことに同意しました。その後、ふたりは夕食を食べに私の家へやって来ました。

ふたりの助けによって、私はほかの少女たちにも教え始めました。少女たちが教会へ来ない場合には、彼女たちがいる所ならどこへでも出かけて行ってレッスンをしました。ボーリング場でも、車の中でも、寝室や玄関先でも。私のような者でもクラスに出る必要があるのなら、その少女たちはなおさらだという強い確信がありました。ある日、洋服ダンスの中に隠れている少女にレッスンをしたことがありました。そのときその少女は出てきて、こう尋ねました。「私の自由意志はどうなるの。」私は自由意志に関するレッスンを受けたことがなかった^{ので}、彼女に、次の水曜日に教会に来て、私たちに自由意志のレッスンをしてくれるよ

うにと頼みました。

ライラとロイスは私の娘のように思えてきました。ふたりは裁縫や聖句の調べ方などを教えてくれました。そして、いつも微笑みを絶やさないうたりを見て、何よりも大切なことを私は教わったのでした。6カ月後、残る14人の少女がクラスへ出席するようになり、1年とたたないうちに、全員が活発になりました。みんなで一緒に祈り、福音を学び、人を助けることを学びました。小児科の病院へも何度も訪問しました。愛の絆の中で、共に笑い共に泣きました。1年3カ月後に、私は若い女性の会長になりました。

教師であったとき、私は監督の指示を決して拒むまいと

決心していました。そして、現在に至るまで実際に一度も拒んだことはありません。それを私に教えてくれたのは、ふたりの16歳の少女だったのです。後になってわかったことですが、あの笑顔の監督も私の家へ初めてやって来たとき、実は私と同じように不安で一杯で、私がクラスを教えに来ることはよもやあるまいと確信していたそうなのです。しかし、私は、確かにやり遂げることができました。そして、心から感謝しています。□



「お前を逮捕する」

ウォルター・H・ホーン



19 28年7月25日に、私はドイツのハイルブロン市で街頭伝道をしていました。当時、宣教師はいつもふたりそろって同じ所を伝道しなくてもよかったので、私は通りの片側を、同僚は反対側を受け持つことがよくありました。

次の家へ向かって歩いていくと、歩道のそばの椅子に男の人が座っていました。彼はにらむような顔つきで私の方をじっと見ていました。その当時、ドイツ人は宣教師を信用していなかったので、あまり気にも留めませんでした。近くのアパートの戸口で女の人と話していると、私の後ろでだれかが近寄ってくる足音が聞こえました。振り返ると、制服姿の警官です。きっと上の階に用事があるのだらうと思ひ、そのまま話し続けました。

ところが驚いたことに、警官は私の肩にずっしりと手をのせ、彼の方へぐるっと振り向かせたのです。

「一緒に来るんだ。お前を逮捕する。」警官は静かにこう言いました。

まさに晴天の霹靂です。私は努めて自分を落ち着かせ、先程の女性におわびして、「また、戻りますから」と言いました。

「どうして逮捕されるんですか。」警官に向かって尋ねると、私がアパートに押し入り、貴重な家宝の時計を盗んだためだと言うのです。

警官の説明によると、ある人が昨日の朝、時計がなくなっているのに気づき、この建物に入ったのは、自分自身と家族以外には私しかいないと主張したというのです。

確かに私は前日、その建物に入りました。そこは1階と2階が工場で、3階がアパートになっていました。入口で若い男の人が近寄ってきて、だれに会いに、どこへ行くのかと尋ねました。そこで、上に住んでいる人たちに話をしたいと言うと、彼はそれ以上何も言わなかったので、私はそのままあがって行きました。

3階のアパートへ入るドアが少し開いていました。ノックをしましたが、だれも出て来なかったので、私は戻って別の所で伝道を始めたのです。

警官は私の説明を聞き、逮捕した男が宣教師であることを知ってびっくりしました。

それから警官は私を連れて通りを渡ると、さっき私をジロジロ見ていた男の人の所へ行きました。そばにいた少年が何だかそわそわして落ち着かない様子でした。警官が私を指してこの人が泥棒かと尋ねると、少年は「はい」と答えました。警察へ着くと、署長の部屋へ連れて行かれました。そこには、数人の私服の人々と制服姿の警官が待機しており、警察裁判（警察裁判所判事が裁判する軽犯罪即決

裁判）が始まるころでした。部屋の一角には、私が建物に入るのを見たという7人の目撃者が座っていました。

1時間余りの尋問が続きましたが、主が助けてくださるようにと心の中で祈りながら、どの質問にも正直に率直に答えました。

その後、7人の目撃者が私に不利な証言をしました。前日に3階のアパートへ入ったのは、被害者の家族以外は私だけだと、全員が口をそろえて証言したのです。次第に、ドイツの刑務所で数年過ごすことになりかねないようになってきました。

署長は私に何か弁明すべきことはないかと尋ねました。私は心の中で必死に助けを願い求めた後、片言のドイツ語で、初めのうちは口ごもりながら話し始めました。まず、自分がなぜドイツにいるのか、次に伝道についてみんなに説明しました。すると、突然、私は福音について語り始めたのです。不思議な気持ちが出て、次第に自分の意志とはかわりなく舌や腕が動き出し、表情まで自然と浮かんできました。

「聖霊」が助けに来てくれたのです。急に私は堂々と力強く流暢にドイツ語を話し始めました。45分後に証を述べ終わったときには、ぐったりと疲れ果て、あやうく床の上へ倒れそうになってしまいました。部屋は静まり返り、沈黙は少なくとも1分間続きました。

すると、署長がぼつりと言いました。「この男は時計を盗んではない。」

署長は私自身のことや教会のことをいろいろと尋ねました。もう私に敵意を抱いている人はひとりもいませんでした。そして署長は捜査官に向かってこう言いました。「この青年と一緒に彼の部屋へ行って、所持品を調べなさい。もし時計が見つからなければ、彼を釈放してやりなさい。きっと見つからんと思うがね。こんなばかげた『相手違い』はそれで終わりだ。」

捜査官と一緒に帰る途中、私はいろいろな質問に答え、私の部屋へ着くころには、伝道のプログラムやモルモン経について、また私たちが主に対してどのような概念を持っているかについて、簡単に説明し終わっていました。

捜査官は私の机の引き出しの中から、時計を2個見つけました。ひとつは、私の古い壊れた時計で、もうひとつは、同僚の安物の時計でした。捜査官は帰り際に、ハイルブロンに滞在中、何か困ったことがあればいつでも連絡するようにと言ってくれました。

私は感謝と祈りの気持ちで、ほっとため息をつきました。「聖霊」の力が現われて、奇跡的な働きをしてくれたのです。決して忘れられない出来事でした。□

すべての生徒を教える

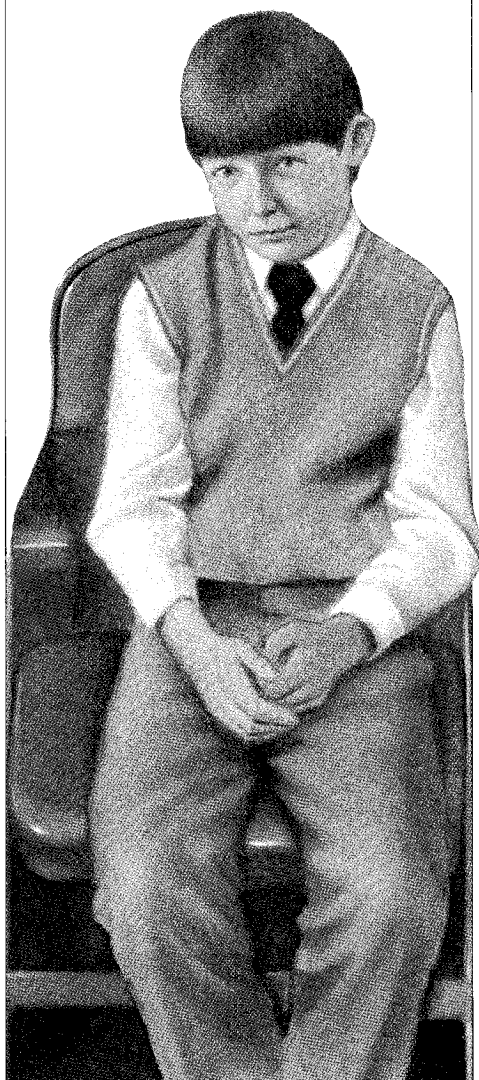
ディクシー・キャスパー・ネルソン

いつものように初等協会のレッスンが始まりました。私は8歳の子供たちを前にして、ある末日の予言者について話をしていました。話を終わると、この話の中から教訓を引き出すために質問をし始めました。生徒たちは皆、質問に答えようとします。ところが、ロバートだけは違いました。

私はそのことにあまり気を留めませんでした。ロバートはまだクラスに入ったばかりだし、初めてなので、たぶんみんなの前で話すのが恥ずかしいのだろうと思ったのです。けれども質問の答えが出て、みんなが話し合っているうちに、私はロバートの顔がだんだん暗くなっていくのに気づきました。彼はレッスンを理解していなかったのです。

前の週のレッスンのときは、準備したレッスンを全部する時間がありませんでした。今回もやはり時間が足りなかったので、ほかの生徒を待たせて、ロバートのために説明を繰り返すことはできないと思い、先に進むことにしました。そしていずれにせよ、おそらくまたいつか同じような概念を教える機会があるだろうと自分に言い聞かせました。

私は素早くみんなを見渡して、そのほ



かの生徒がみんな理解していることを確かめました。ところが、ロバートと目と目が合ったとき、心臓が止まるかと思うほどびっくりしました。一瞬ロバートの顔が消え失せ、その代わりに私の3歳の息子のサム顔が見えたのです。私はハッとして立ちすくみ、もう一度同じことが起きるのではないかと思い、ロバートの顔をまじまじと見つめました。けれども、二度と再び同じことは起こりませんでした。

その晩、私はその出来事について考えていました。自分のしたことに自責の念がわきあがってきます。突然、5年先の情景が頭に浮かびました。ロバートの席にはサムが座り、私の代わりに別の教師が立っていました。そして、教師は私のときと同じ話を聞かせ、息子はロバートと同じ反応を示しました。

教師はサムを見て、サムが理解していないのがわかりました。けれども、とにかくレッスンを先へ進めました。

「たぶんまたいつかこのレッスンをすることがあるでしょう。そのときになったら、サムはたぶんわかるわ。」教師はそう独り言を言いました。

サムは床に届かない足をブラブラさせ



ながら、ひとりぼつと椅子に座っていました。ほかの生徒たちは、レッスンをどんどん先へ進めて行きますが、サムだけがわけのわからないまま取り残されています。

そのとき、私は自分のしたことの重大

な意味を悟りました。ただ単に自分の手間を省くために、ひとりの神の子供をないがしろにしたのです。また、大切な教えるチャンスを逃してしまいました。子供を天父に近づける貴い機会を与えられていながら、背を向けてしまったのです。

私はその日に学んだ次のような教訓を、決して忘れることはありません。私自身がひとり残らずすべての生徒のために最善を尽くさなければ、ほかの教師が私の息子のために最善を尽くすように求めることはできないということ。□

だれも、ふたりの主人に 兼ね仕えることはできない



もう二度と繰り返すまい

エレイン・ヴォーン

監 督が新しい転入家族の名前を読みあげ、歓迎の言葉を述べています。私はその家族がどこに座っているかと礼拝堂の中を見回しました。聖餐会が終わったらすぐに自己紹介をして、知り合いになろうと決心していたのです。

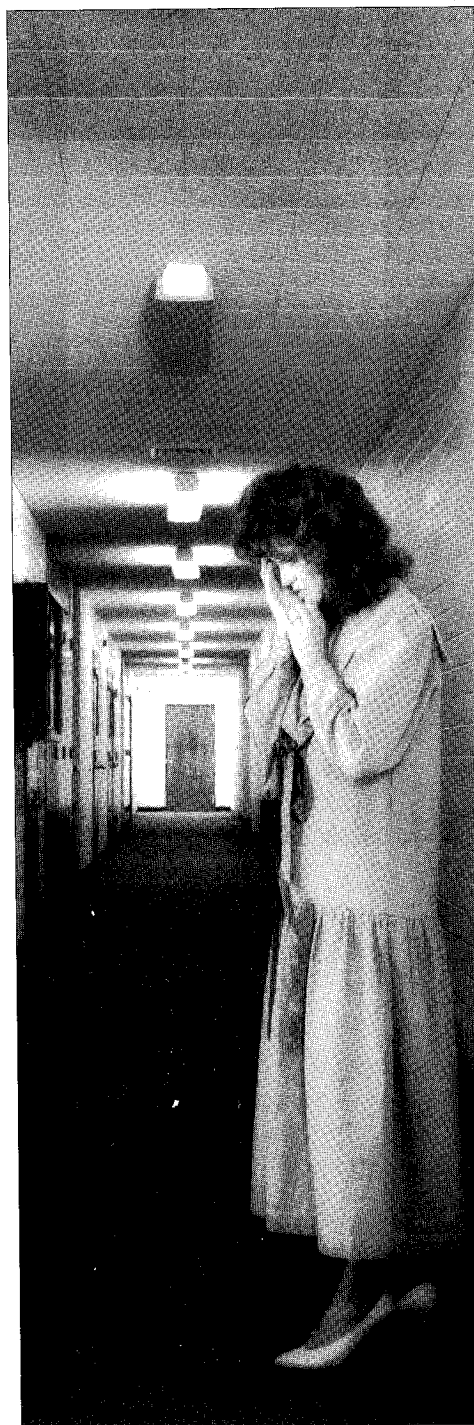
そのとき私の頭に浮かんでいたのは、この前の聖餐会でお別れの証をしてくれたショー姉妹のことでした。ショー姉妹はこのように言いました。「日曜日ここに出席するのはこれで最後です。皆さんとお別れる前に、ひとつの経験をお話したいと思います。」

サンディ・ショーは、夫が通学するためこの一年間私たちのワード部内に住んでいました。初めて彼女に会ったのがいつだったかは覚えていませんが、彼女は私たちのワード部の霊的生活の教師であるネイヴァ・ギルマン姉妹と特に親しい間柄だったようです。

ショー姉妹の話はこのようなものでした。

「前にいたワード部では、みんなに愛され、深い安らぎを覚えていました。私は生まれてからずっとそこに住んでいたのです。それで、主人と一緒にここへ移ってきたときは、見知らぬワード部へ出席するのが怖くて、数週間教会には来ませんでした。でもすぐに、毎日の生活にぽっかりと穴があいたような空しい気持ちになり、次の集会には必ず出席しようと決心したのです。」

教会へ足を踏み入れたときは、不安で一杯でした。分級するとき、だれかが私に声をかけて、どこへ行ったらよいかを教えてくださいたいのと思いました。私の方から話しかけるべきだということ



はわかっていましたが、言葉が出てこないのです。人々は私の前を通り過ぎ、仲の良い人の所へ行ってしまいました。中には私に微笑みかけてくれた人もいました。でも、間もなくドアが閉まり、ホールには私ひとり取り残されてしまいました。どうすることもできなくなって涙を流しながら、教会を出ました。

その晩、私は頼ることのできたたったひとりのお方、すなわち天父に向かってこう嘆願しました。「天のお父さま、私はこれまでずっと活発に教会へ出席していました。でも、知らないワード部へは怖くて行けません。とてもひとりでは行けないのです。」

翌朝、玄関のドアを開けると、少し緊張した面持ちの見知らぬ人が立っていました。「こんにちは。私はネイヴァ・ギルマンと申します。どうしてここへ来たのか自分でもよくわからないんですけど、お宅に立ち寄って、一緒に扶助協会へ行くようにお誘いしたいという強い気持ちを感じたのです。」

私は感激して涙を流しながら、彼女を招き入れました。」

ショー姉妹の証を聞いて、私は自分自身を反省しました。今まで私は、新しく教会へ来た人たちに対して何と言っているかわからないために、ただ微笑んで「こんにちは」と言ったきり、そのまま通り過ぎてしまったことが何度もあったことでしょうか。

そのようなことは、もう二度と繰り返すまい。私は心の中でそう決心したのです。□

*エレイン・ヴォーン姉妹は、ワシントン州スポケーン第9ワード部在住。

イエスのみもとへ行く

目的：教会の使命を達成するために努力し、みずからキリストのみもとへ行き、さらにほかの人々もそうできるように助けを与える。

主は「見よ、これわが業にしてわが栄光、すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり」(モーセ 1：39)と言われました。イエス・キリストは贖いを通して、私たちが永遠の生命を受け継ぐことができるようにしてくださいました。それを教えられている私たちには、同胞が永遠の生命を受けられるように助けを与える責任があります。

主は慈悲深いお方です。主はそのみもとへ行く人の重荷を軽くし、心を清めてくださいます。しかし、私たちはそうすることに恐れやためらいを覚えることがあります。また福音は本当に、夫婦間の問題、経済的な重荷、職場や学校での緊張、病がもたらす苦しみ、孤独感、罪などを解決し、取り去る力があるのだろうかと思いを覚えることもあります。

救い主は、確かに私たちの重荷を取り除いてくださいます。ある姉妹は差し迫った問題に直面したときに、昼も夜も天父に祈ったそうです。そして贖いの必要性を理解したので。彼女はこう言っています。「救い主がいなければ自分の過ちを取り去ることはできません。また成長し続けていくこともできません。」

彼女は救い主の愛を感じて、圧倒される思いでした。「常に神が見守ってくださっていたこと、また楽しいことであれ、苦しいことであれ、信仰をもって受け入れるなら、過去の経験も将来の経験も、最終的にはすべて自分の益になるということを理解しました。」(「エンサイン」1977年9月号, pp. 50-51)

信仰をもって主のみもとへ行くなら、主はすべての問題について、それが解決できるよう私たちに助けを与えてく

ださいます。そして主の力と愛を感じた人は、兄弟姉妹を力づけ、祝福し、人々を神のみもとへ導きたいと願うようになるでしょう。

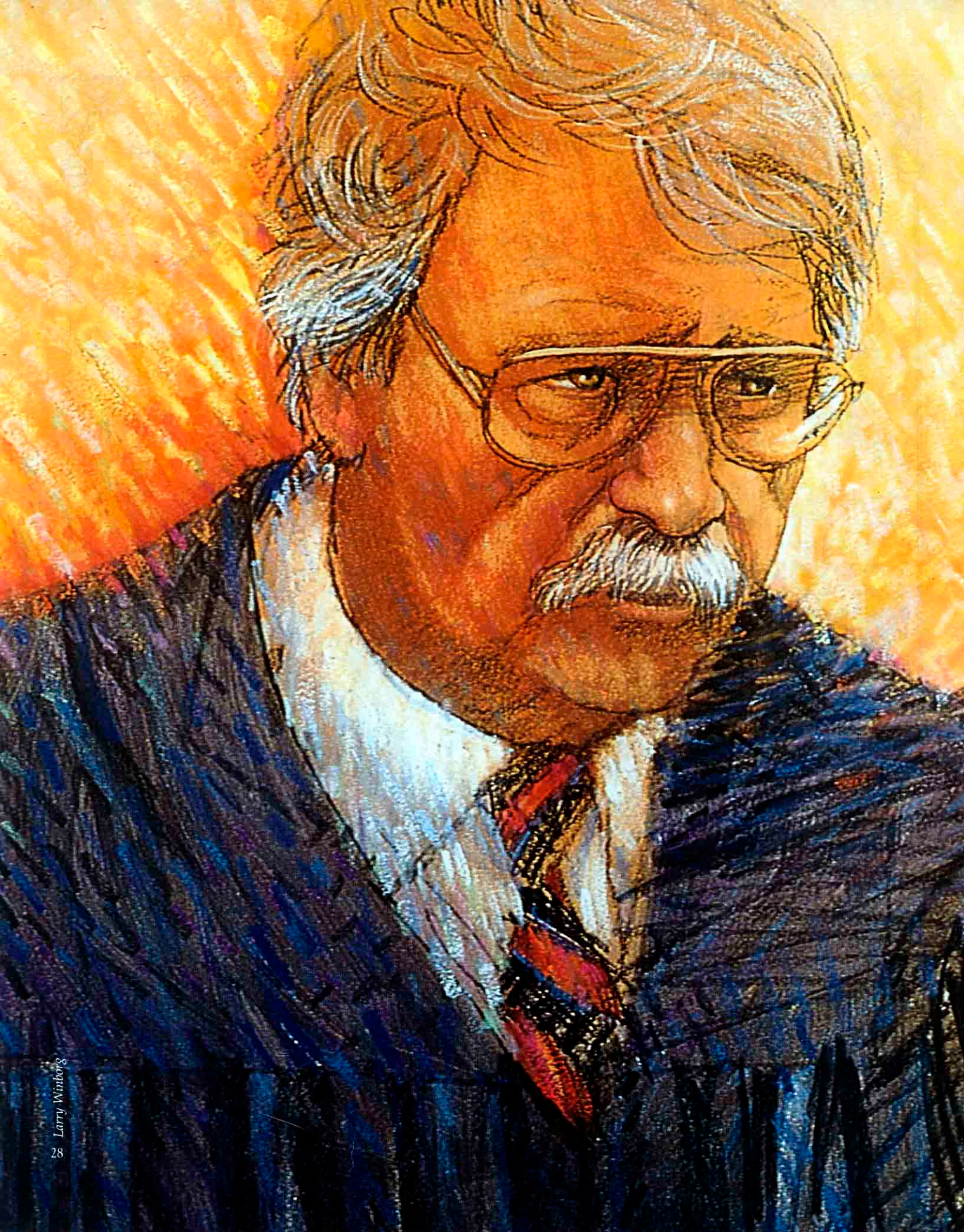
私たちは教会の使命を形作る3つの分野に心を向けることによって、このみ業の達成を後押しすることができます。エズラ・タフト・ベンソン大管長はそれについてこう言っておられます。「私たちには教会の3つの使命を達成するという神聖な責任が与えられています。ひとつは世の人々に福音を伝えること、そして全世界の教会員を強めること、死者の救いの業を推し進めることです。」(「神聖な務め」「聖徒の道」1986年7月号, p. 77)


ベンソン大管長は、贖いを受け入れ、兄弟姉妹を愛し奉仕する人は、「人に不死不滅と永遠の生命とをもたらす」(モーセ 1：39) ための主のみ業を助けることができると述べています。□

訪問教師への提案

1. 教義と聖約18：10-16を読み、私たちへの主の愛、また私たちが兄弟姉妹に対して持つべき愛について、この箇所にはどのようなことが書かれているかを話し合う。
2. 福音と贖いが自分たちの生活にどのような祝福と変化をもたらしたかについて、実際に体験したことを話し合うとよい。何か問題があるときには、救い主の助けを得て解決するよう勧める。

(「家庭の夕べアイデア集」 pp. 41-57, 120-130, 229-230 参照)





「バート！ どんななかでも正しいことはできるさ。難しいのは何が正しいかを知ることなんだ。」

理解の賜

F・バートン・ハワード

法律大学院を卒業後、私は幸いユタ州最高裁判所に事務官の職を得、そこで裁判の流れを学び、裁判官を個人的に知るようにもなりました。対立する訴訟当事者の弁護士の説得力ある弁論に耳を傾けたことや、一方の側の主張に動かされながら、もう一方の側の主張に動かされたりしたことをはっきりと覚えています。

裁判所を辞めて何年か後に、私はよく知っている首席裁判官にばったり出会ったことがあります。私たちの話題は裁判の運営という管理上の難題となりました。その首席裁判官は疲れ果てていました。でもあと数カ月すれば退職して、すべての法廷闘争を他の裁判官に引き継いでよい年齢に達するのです。彼はそのことについて真剣に考えてきたことをほのめかしました。

「君はどう思うかね？」と私に聞きます。

私は裁判官としての重責から逃れたいと思う彼の気持ちがわからないでもありませんでしたが、こう言いました。

「退職ですって、判事。退職はしないでください。判事にはおわかりにならないでしょうが、常に正しいことをしようとする裁判官がいることは私たち一般人にとってはとても心強いものです。」

すると驚いたことに、彼は腹を立て、声をあらげて言いました。「パート！どんなばかでも正しいことはできるさ。難しいのは何が正しいかを知ることなんだ。」

それは、裁判官としての彼の最大の関心事だったのです。すべての人が法律を意識して自分の行動がどうあるべきかを考えているわけではないが、いったん法律が決まってしまうばそうするのは難しくないということを、彼は言っていたのです。しかし、それよりも大変なのは、法律の何たるかを判断して、頭のいい弁護士たちが持ち出してくる甲乙つけがたい興味をそそり、しかも理路整然とした主張を裁定することでした。彼にとってさらに難しいのは、訴訟当事者のどちらが正しいかを判断することでした。

選択が困難なとき

私たちの生活にもこれと同じことが言えないでしょうか。

私たちは日常、数々の決断に迫られますが、そのときにどうすべきかを選択、判断するのは難しいものです。選択肢がどれも良いものに見える場合は特にそうです。

ひとつの例をあげましょう。あなたはこの何カ月間、勤め口を探していると考えてください。借金して車を購入了ましたが、もしすぐに就職できなければ、ローン会社に車を返さなければならなくなってしまいます。雨の降る11月のある朝早く、あなたは今までになく見込みのある仕事の面接を受けに行く途中です。ところが時間に遅れているうえに燃料もどうにか目的地にたどり着けるだけの量しかありません。

信号待ちのため速度を落としていくと、友達が雨の中、バスの停留所に立っています。それでなくても遅れているのに、友達を乗せていたらますます遅れることはわかりきっています。また制限速度をオーバーして走らなければ約束の時間に間に合わないことも、しかしスピード違反をすれば運転免許を失うこともわかっています。

いずれにせよ決断をしなければなりません、あなたならどうするでしょうか。それぞれの状況を別々に考えれば、どうすべきかはだれでもわかるでしょう。言うまでもなく、国の法律を破って制限速度以上のスピードで走ってはなりませんし、車を止めて給油をすべきです。友達も乗せてあげるべきです。また仕事も経済的な安定と幸福を得るためにとても大切なものですから、仕事を得るためにはそれ相当の努力もしなければなりません。あなたはどうするでしょうか。車を止めるか止めないか、スピード違反をして走るか走らないかのどちらかです。法律を破っても大したことではないのでしょうか。仕事に就けばどうでもよいのでしょうか。免許証を失っても構わないのでしょうか。友人を乗せてあげなくてもいいのでしょうか。ひよっとすると燃料切れ、あるいはスピード違反で捕まるといふ、思いがけない結果が待ち受けているのではないのでしょうか。また取り返しのつかない結果が待ち受けているのではないのでしょうか。

このような場合、どうすべきか判断するのは非常に難しいことがあります。しかも選択を間違えると、永久に取り返しのつかない結果を招くこともあるのです。

私たちの中には、罪に近づきすぎる人もいれば、悪の中にとどまる人、悪から遠ざかる人、あるいは、道徳律や国の法律に従順な人、不従順な人など、様々な人がいます。しかし、それらの選択はどれも、私たちの人生に永続的な

影響を及ぼしかねません。ではどうしたら正しい道を見いだせるのでしょうか。また、ひとたび見いだしたとしても、その道を歩み続けるにはどうしたらよいのでしょうか。

福音にそった生活をするという課題

交通量がそれほど多くなく、道路に標識がある間は、「まっすぐな狭い道」を走り続けるのは比較的やさしいものです。ところが、途中で私たちは頻繁に、それぞれの自由意志を行使している人々に出会います。そして好むと好まざるとにかかわらず、彼らの要求や期待が私たちの行動や選択に影響を与えていることに気づきます。試験になると友人たちは、「おい早く。平気だよ、みんなやってるんだから」とか、「だれにもわかりっこないさ」などと言い不正な行為を行なうように勧めることもあります。

人生のすべての問題に前もって答えを用意するのは困難ですし、選択を迫られたときに、自分の知識を活用するのは決してたやすいことではありません。福音にそった生活をするという課題は、自分が選択した状況の中でやっていくのではなく、自分の意志では完全にコントロールできない状態の中でやってきます。私たちが日々行なう多くの選択がまったく未経験のものであり、前例がないのはそのためです。完成への原則を実行すべく努力しながら、自分の道を見だし歩いていくしかないので。聖典には役立つことがたくさん載っていますし、ほかの人々の経験から学ぶこともできます。結局、私たちは何をするのか、しないのかという点については、自分自身で判断し、決めなければならないのです。

もちろん主はこのことをすべてご存じです。私はこれに関する主のみこころについてははっきりとした確信を持っています。たとえば、主はこのように述べておられます。「見よ、われ汝らにすべての事を悉く命ずるは至当ならず。そは、すべての事已むを得ざれば為さざる者は怠惰なり、賢き僕にあらざればなり。これを以て彼は良き報いを受くることなし。

われ誠に汝らに告ぐ、人は努めて善き業に従い、多くの事をその自由意志によりて為し、多くの正しき事を為し遂げよ。

そは人自らの中に自由の意志ありて己れの事を自ら為す

者なればなり。従って人善を為さば決してその報いを失わざらん。」(教義と聖約58：26-28)

つまり自分の生活は、自分自身で管理しなければならないということです。たとえ命じられていないことであっても、自分から行動を起こす必要があるのです。要するに、私たちは自分の意志に関係なく、天の意志や戒めだけで動く存在ではないということです。

簡単に言うと、現世は試しのときです。主は言っておられます。

「われ汝らに一つの誠命を与う。すなわち、汝ら須らくすべての悪を捨て去り、すべての善に固く就くべし。また、須らく神の口より出ずるあらゆる言によりて生くべし。

神は忠信なる者たちに、規則に規則を加え、誠命にいましめを加えん。かくしてわれはこれを以て汝らを試み汝らを験すべし。

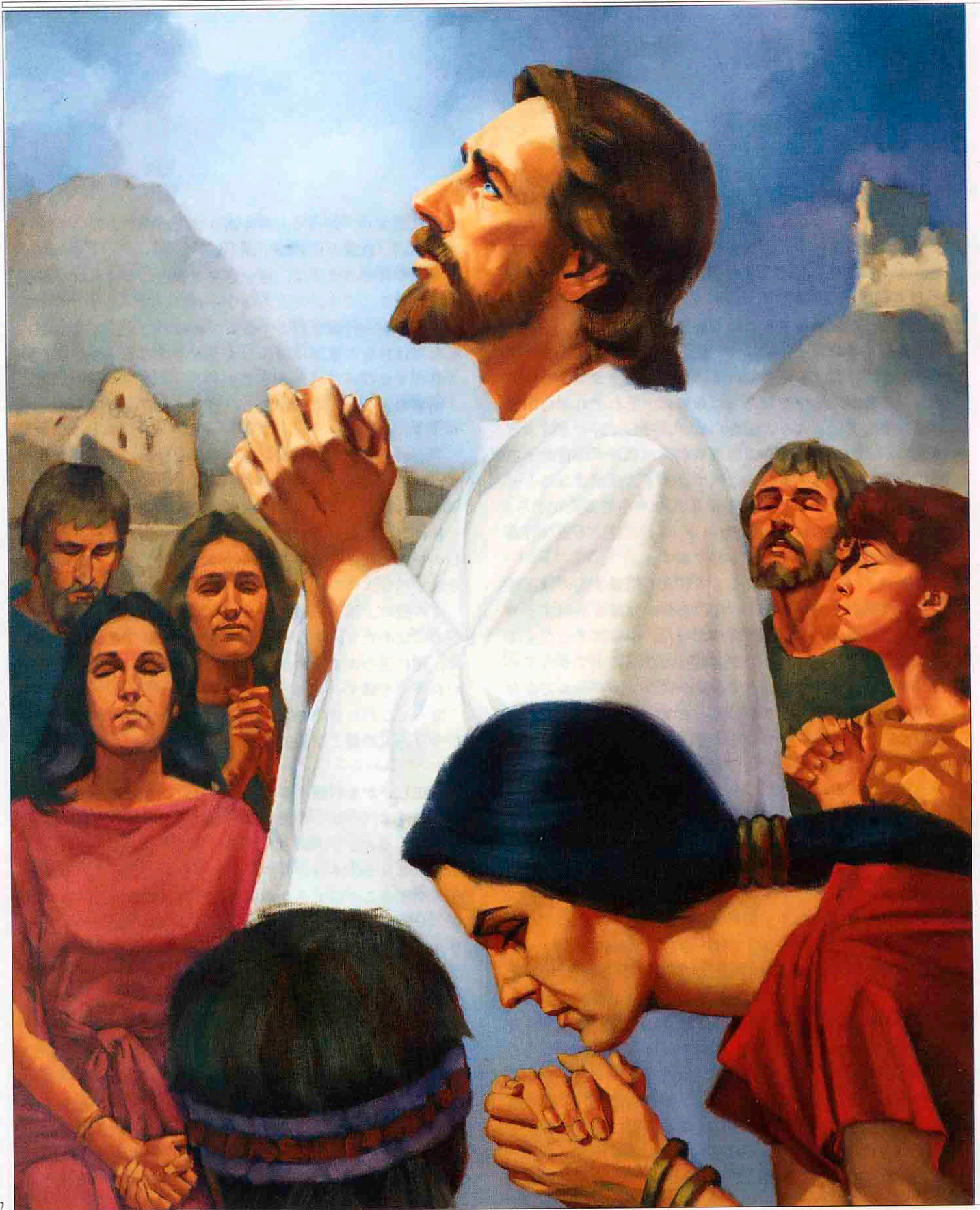
この故に、汝らの敵を怖るるなかれ。主は言う、われわが心に定めたり、すなわち汝らのわれに適しきを知るために、死に至るまでもわが誓約を守るや否や、すべてに於てわれ汝らを試すべし。

汝らもしわが誓約を守らずんば、われに適しからぬ者たちなり。」(教義と聖約98：11-12, 14-15)

何が正しいかを判断するのはやさしいことではない

この死すべき試しの世では、神の子らは自分自身の意志で選択することを求められます。もしそうでなかったら、私たちは自分の本当の姿や、自分が本当に望んでいることを判断することはできないでしょう。私が言っているのはこの分野についてです。つまり何ら具体的な勧告や戒めが与えられていない分野、なすべきことや方法がわかっていない分野についてなのですが、これこそ最高裁判所に勤務する私の友人が、「難しいのは何が正しいかを判断することなのだ」と言った分野でもあります。

一生を通じて、私たちはしなければならぬことと、したいことの間で、どちらを選ぶか選択を迫られます。テレビを見るのか家庭訪問に行くのか。家族と一緒に過ごすのか友人と過ごすのか。聖典を読むか小説を読むか。子供を家に置いていくか一緒に連れていくか。借金をするかしないか、など選択の機会は実に様々です。いずれの場合でも、



Ted Henninger

一方を選べば一方ははずすことになります。もしそうでなければ、真の試しは存在しないことになってしまいます。自由意志による選択は、救いの計画を定められたお方のみこころなのです。主は自由意志による選択を通して、自分の心がどこにあるかを気づかせ、それによって、私たちの本当の姿を知らせようとしておられるのです。

私たちはしばしば、ふたつの良いものの中からどちらかひとつを選ぶように求められます。これは福音の中に含まれるひとつの逆説的命題です。たとえば、ある召しに費やす時間の量と、その中でできる善行とは直接的な関係があります。監督は助けが必要なひとりの会員を訪ねることにより、たくさんの善い行ないをすることができます。10人の困っている会員を訪ねたら、その10倍善い行ないをすることができます。それでは訪問にどれ位の時間をかけたらいのでしょうか。私たちは聖典を研究し、その内容について深く考えることによって主に近づきます。一層熱心に研究し、真剣に考えるなら、なお一層近づくことができますが、それではどれだけ勉強すればよいのでしょうか。良い父親は家族と共に時を過ごしますが、もっと良い父親はさらに多くの時間を使って、週に一度は妻と夕べを外で過ごします。

しかしどこで線を引いたらよいのでしょうか。どこまでが十分で、どこまで行くとやり過ぎなのでしょう。どの程度までするのが活発なのでしょう。どこまで奉仕すれば十分と言えるのでしょうか。どこまで愛を示せばよいのでしょうか。どこまで行なえば家庭を大切にしていると言えるのでしょうか。バランスの取り方について考え直さなければならぬ点はないのでしょうか。アリストテレスはこう言っています。

「善良でいることは生易しいものではない。万事に中庸を見いだすのはなかなか容易なことではないからである。……だれにでも怒ることはできるし、それはたやすいことだ。また金を与え、使うことはできる。しかし、これをふさわしい人に、適度に、適切なときに、正しい動機から、良い方法で行なうのは、だれにでもできることではないし、易しいことでもない。それゆえ、善良であることは、貴くもあり、立派な賞賛すべきものでもある。」(『人と人：社会科学者』「世界の偉大な思想家」第2巻、p. 352a)

毎晩家で妻と過ごしたら、それで良い夫になれるのでしょうか。子供に恵まれていない人なら、暇な時間をすべて妻のために使うことができるかもしれません。しかし、そのような人が良い夫と言えるのでしょうか。答えははっきりしています。そのようなことで良い夫かどうかを決めるのは愚かです。夫であれ、妻であれ、子供たちであれ、あるいは教会であれ、だれもすべての時間を要求しているわけではありません。もし親が四六時中かまったら、子供たちは親の影に隠れて、依頼心の強い子になるでしょうし、教会にしても、専任の監督を置くとすれば、それは有給の聖職者を抱え込むのと同じであり、神の子を全き者とするように定められた神聖な組織どころか、むしろ教会自体が減ってしまうことでしょう。

望ましいバランス

ほどよいバランスといっても、それは個々の教会員の必要や能力によって異なります。しかし、家族、教会、勤め、そして自分のために全時間を費やすところまではいかになくても、望ましいバランス、明らかに必要なバランスというのはあります。創造主から与えられている時間には限界があるからです。かといって御父から与えられた時間という財産を非難しないようにしてください。それは思い違いです。むしろ、その時間を用いて何をするように求められているのかを考えましょう。

私たちには人生においてみずから引き受けなければならない幾つかの責任があります。それらの責任は、あれをすればこれはしなくてもよいという性質のものではありませんし、実際そうあつてはなりません。どの責任を果たすにも時間が必要です。父親、扶助協会会長、セールスマン、学生など、どのような立場にあつても、その責任を果たすには時間が必要ですし、奉仕をするにも時間が必要です。当然、葛藤が生じます。しかし、ある分野でよい成果を得るには、必ずしも別の分野を犠牲にしなければならないとは限らないかもしれません。主は私たちにシオンでのんきに暮らさせるつもりはありません。(II ニーファイ28：24参照) 主のみこころは、何事も「賢く秩序正しく」(モーサヤ4：27) 行なわれることなのです。

適度のバランスとはふつう、ひとつの道だけを選んで、

ほかの道をすべて除外することではありません。そうではなく、自分に必要な道をすべて進むのです。ただし、必要以上のことはすべきではありません。それによって、天父からも望まれている他の道において遅れをとるようなことはありません。だとすれば、「しかるべき時に、しかるべき所に」いて、「なすべきことを、なすべき時に行なう」ことが非常に重要になってきます。なぜなら私たちはみずからの選択によって裁かれ、どのようにバランスをとるかによって、自分自身を作り上げていくからです。

「汝らはたえず祈らざるべからず」

さて、私たち末日聖徒は、物事の決定や生活のバランスの取り方を適切に行なうことができるでしょうか。私は主のつたないひとりの弟子として、それが可能であることを証します。

救い主はニーファイ人に教えと導きを与えた1日目の最後に、彼らに祈るように教えられました。

「されば汝らはわが名によりてたえず御父に祈らざるべからず。而して、汝らが必ず受くと信じて、わが名によりて御父に乞い求むるものは、その正当なるものなる限り、すべて汝らに与えらる。」(IIIニーファイ18：19-20)

私はよくこのときのことを考えます。たぶん世界の歴史に残るすばらしい場面ではないでしょうか。ニーファイ人は都市の破壊や、愛する者の死、肉親との別れ、家や財産の喪失という苦難を経験したばかりでした。彼らは混乱と恐怖の中を生き延び、3日間の完全な暗闇を体験し、全世界の住民のために熱心に祈りを捧げたのでした。

それから彼らは天からの声を聞き、人の子が天降^{あまくだ}って来られるのを見ました。人の子が語りかけられた一言一句が彼らの心の中に永久に刻み込まれたことでしょうか。このような状況のもとで、イエス・キリストは、彼らが御父に願ひ求めるものは、それが正当なるものであればすべて与えられると約束されました。彼らは、イエスが自分たちを離れて昇天された後もその約束を忘れませんでした。聖典に記されているように、彼らは散り散りになって家へ帰りましたが、彼らが目にし耳にしたことは、まだ暗くならないうちに民の間に告げ知らされました。多くの人々は、明日イエスが現われたもう所へほかの人々も連れて行けるよう、

一晚中働いて用意をしました。

翌日になって、民の指導者として召されていた十二弟子たちが、前日教えられていたように人々をひざまずかせて祈りをさせました。人々は心をひとつにして、イエスのみ名によって御父に祈りました。イエスの約束を覚えていた彼らは、自分たちが一番望むことを願ひ求めました。家族の病気の快復や、愛する者たちとの再会、病人や傷ついた人々の癒し、指導者、敵対する人々のためなど、あらゆることについて祈り求めることができたと思いますが、彼らが実際に祈り求めたものは何だったのでしょうか。聖典にはただこのように記されています。「かれら(は)……聖霊をかれらに与えたもうことをねがった。」(IIIニーファイ19：9)

ニーファイ人は、聖霊の働きと目的を説いたニーファイ自身の教えを堅く信じていました。ニーファイは次のように人々に問いかけました。

「さて私の愛する兄弟たちよ、私は尋ねたい、あなたたちはこの真直で狭い道に入ったら、(バプテスマを受けて教会員になり、罪の赦しと聖霊の賜を受けること)それで万事終りであるか。ごらんそうではない。あなたたちがもしもキリストの言葉によってキリストを確く信仰し、人を救う大きな能力のあるキリストの功德に全く頼らなかつたなら、あなたたちはここまで進んでくることさえできなかったのである。

それであるから、あなたたちはこれからもキリストを確く信じて疑わず、完全な希望の光を抱き、神とすべての人々を愛して強く進まなければならない。それであるから、この後もたえずキリストの言葉をよく味わいながら強く進み、終りまで堪え忍ぶならば『永遠の生命を受ける』、かくの如く天の御父が言いたもうた。」

そして彼は次のように続けています。これは私にとって非常に重要な意味を持つ言葉です。

「ごらん、また言うが、前に話した道によって入り聖霊を受けるならば、聖霊はあなたたちの行わなくてはならないことをみな教えたもう。」(IIニーファイ31：19-20；32：5，下線付加)

ニーファイ人がほかの何にもまして聖霊を望んだのは、何の不思議もないことです。なぜなら、なすべきすべての

ことを教えてくれる聖霊なくしては、天父のみもとに帰ることも、幸福と永遠の生命に至る正しい選択をすることもできないからです。彼らはこの尊い賜が聖霊であることを知っていたのです。

救い主と一日を共にしてからのニーファイ人は、試しの条件を、おそらく私たちよりもっとよく理解していただろうと思います。みもとに帰る道を見いだすには、彼らは生活の中で神の助けが必要であることを理解していました。

主が望んでおられる所

教会では、聖霊の賜について多くのことが語られてきました。バプテスマを受けている私たちは、それぞれこの賜をいただいています。私たちは、ふさわしさを備えていれば、集団としても個人としても、聖霊の賜によって地上の他のどの民とも異なる特別な民になることができます。

もし私たちがふさわしい状態にあり、心の中に示されるみたまの導きに従っているなら、自分のしている選択は最善のものだという確信を得ることができます。試練や困難はあるかもしれませんが、自分は主が望んでおられる所にいるのだということを確認できるのです。

これらのことを理解し、自分は総じて主のみこころを行なっているという確信があれば、言い尽くしがたい平安と喜びを味わうことができます。神の真の教えに従わない限り、この祝福にあずかることはできません。なぜならこの祝福は、聖霊を伴侶とすることによってもたらされるものだからです。

ときどき、私は慰め主の勧めに従う前に、時間をとって祈りよく考えましたが、いつの間にかニーファイのように、「私は何をせねばならぬのか、前以てそれを知らずにただひとすじに『みたま』に導かれて行った」(I ニーファイ 4 : 6) ことがしばしばありました。

主はジョセフとオリヴァに言われました。「汝の語りまたは書き誌すべきことは、その場に及びて汝に与えらるるにより彼らこれを聞くべきなり。もし彼らこれを聞かざらば、われ祝福を与えずしてかえって彼らに咄いを遣らん。」(教義と聖約24 : 6)

トーマス・B・マーシュにはこう言っておられます。「何所^{いずこ}にてもわが意のある所に赴くべし。されば、われ汝の為

すべき事行くべき所に就きては『慰め主』によりて汝に告げん。」(教義と聖約31 : 11)

何を語り、何を書き、どこへ行き、何をなすべきかなど、私たちは多くのことについて答えを得なければなりません。しかし、このようなことに関する導きは、まれにしか与えられないからこそ、貴いものとなるのです。予言者ジョセフはマサチューセッツ州サレムで、「主として」彼がとどまるべき所は、みたまの平和と力とによって告げられるというより意味の広い約束を授けられました。(教義と聖約111 : 8 参照) また3人の見証者も、聖霊によって「人の子らの為になるすべての事」(教義と聖約18 : 18)を示される^{こと}と告げられています。

これは非常に重要なことです。だとすれば、マリオン・G・ロムニー副管長が「聖霊の賜を受けることの大切さは言い尽くせない」(「大会報告」1974年4月)と言われた理由を理解するのは容易でしょう。しかし、「言い尽くし難い」というのは、理解できないという意味ではありません。聖霊は、「一切の事の真実であるかどうか」(モロナイ10 : 5)を示してください。世の人々にはそれが理解できないかもしれませんが、私たちは知っています。

主は予言者ジョセフ・スミスに言われました。

「神はその聖き『みたま』により、すなわち聖霊の言い^{ことば}尽し難き賜によりて、世の始めより今日に至るまで嘗て表したまいしことなき知識を汝らに与えたまわん。

これこそ、わが先祖らの末の世に^{あは}顕されんことを熱心なる期待もて待ち望みしものにして、彼らの栄光の完全に顕れんため保存し置かれしと天使らによりて彼らの心に示されたるものなり。」(教義と聖約 121 : 26-27)

確かに聖霊の賜は与えられています。それをどう使うかは私たちの責任です。勧告に耳を傾けなければ何も受けられません。祈り、信仰を働かせ、愛し、従い、霊の幕屋を清く保たない限り、このすばらしい賜を要求することはできません。

皆さんが聖霊の導きを受けられるような生活ができますように。そして賢明な判断をし、知識を行ないに生かされますように。□

*ブリガム・ヤング大学で開かれたファイヤサイドでの講演より。



質問に

答えられなかった

私

クリスティー・ウィリアムズ

数年前のある日、買い物に夢中になっていた私にふたりの若い女性が声をかけてきました。話をさせてほしいというのです。「いいですとも。」私は即座に答えました。

「もしあなたがきょう死んだとしたら、天国に行けると思えますか。」彼女たちが尋ねました。

私がびっくりしたのに気がついたのでしょうか。ふたりはすぐに持っていた聖書を開き、新約聖書から一節を引用してこう言いました。「天国に行くには主イエス・キリストを信じさえすればよいのです。」

そのあとの出来事は今なお苦い思い出となって残っています。その教義に驚いた私は、それまで日曜学校やセミナー、大学の宗教クラスで学んできた新約聖書に関する事柄を思い出そうとしました。しかし、天の王国に入るには信仰を告白するだけでなく、それ以上のことをする必要があったことを明示している聖句はひとつしか思い出すことができませんでした。

ふたりの女性は、すぐに最初の聖句と似た別の聖句を引用しました。私は末日聖徒としての信念をいくつか伝えることはできたものの、とうとう聖典からそれらの原則を引用することはできませんでした。説得力に欠ける私の証に納得しないふたりは、すぐに私から離れ、足速に次の買い物客の所へ行ってしまうしました。

よくある錯覚

スペンサー・W・キンボール大管長はこのように述べています。「聖典の勉強について正直に自己評価してほしいと思う。よく知っていてすぐに浮かんでくる聖句がいくらかあって、そのために自分は福音をかなり知っているという錯覚に陥るのはよくあることである。」（「聖徒の道」1985年12月号）

私はまさにそのような錯覚に陥っていたのです。

大管長はさらにこう続けています。「だれもが一生のうちでいつかは聖典の価値を悟らなければならない、それも一度だけではなく何度も何度も再発見しなければならないと信じている。」（「聖徒の道」1985年12月号）

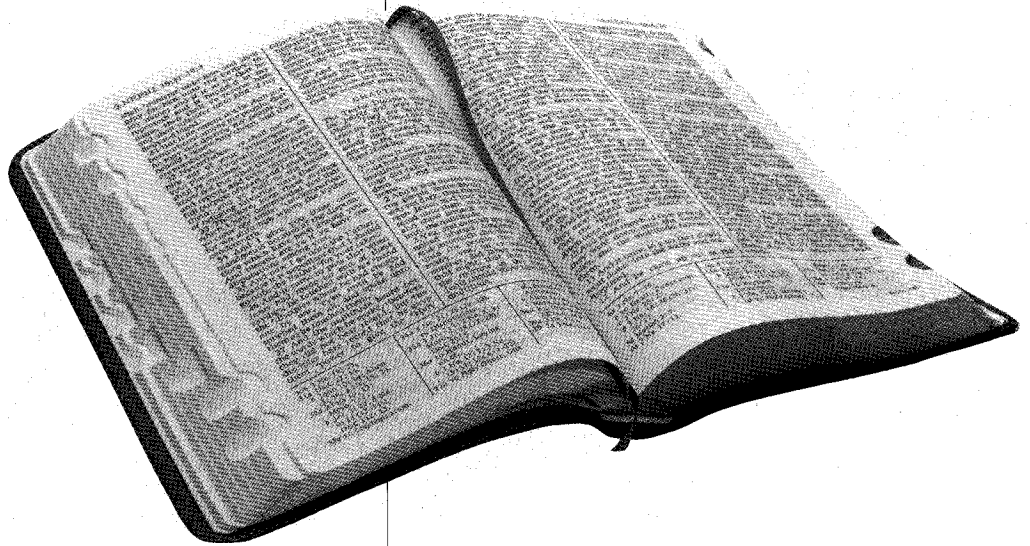
このような体験に失望した私は、二度と同じ目に会わないためにいつもよく準備しておこうと一大決心をしたのです。まず一定の学習時間を決め、福音をもう一度勉強し直したのです。

新約聖書の中で、人々の生き方が同じパターンで繰り返されている点には非常に興味をそそられました。人々はキリストのことを知り、悔い改め、水に沈められるバプテスマを受けることで信仰を示し、按手によって聖霊を受け、従順になることによって進歩し続けていったのです。

中でも私の興味を引いたのは、天国に入るにはどうしたらよいかについて記されている聖句でした。その聖句を暗記した私は、今度またあのふたりに出会うことがあったらこの聖句を引用して答えようと考えたのです。それはこういう聖句でした。「正しくない者が神の国をつぐことはないのを、知らないのか。」（Iコリント6：9）

より深いつながりを求めて

しかし、私の中で別の気持ちが変わってきました。私は知らず知らず、自分の態度や行ないを聖典に書かれている真理と比較するようになっていました。救い主の模範と愛に触れ、すなわちヨハネ伝に記されているような御父への祈りや、自分の思いのままにではなく御父のみこころを行なうために来たという救い主ご自身の言葉に触れて、とても謙遜な気持ちになりました。自分の生活を変える必要性を



いやというほど思い知らされたのです。それからは、想像上の議論に思いを馳せるよりもひざまずいて祈ることの方が多くなってきました。また天父と御子イエス・キリストとのつながりをより深いものにしたと心から願うようになりました。そして今までとは違った備えに、つまりほかならぬ私自身を確実に永遠の生命に導いてくれる備えに目を向け始めたのです。

救い主は、聖典を通して私たちに語りかけてくださいます。またご自分のみこころも示してくださいます。私は、ヨハネ伝1章12-13節を読んだときのことを思い出します。「しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。それらの人は、血すじによらず、肉の欲によらず、また、人の欲にもよらず、ただ神によって生れたのである。」

このようなつながりこそ私が求めていたものでした。私はこのような力を授かるように、すなわち神によって生まれることができるように心から願いました。そしてその答えは、自分が日記にも記し、これまでもたびたび深く考えてきたことだという強い気持ちがしました。すなわち、戒めを守ることによって神の息子、娘となる力が与えられるというものでした。

私は聖典を学んでいて、若者が主のみもとへ来て「永遠の生命を得るためには、どんなよいことをしたらいいでしょうか」(マタイ19:16)と尋ねたように、自分も毎日、天父と御子のみもとへ来て教えを学べるということを知りました。テモテ第二の手紙3章15-16節にあるように、聖典

は「救いに至る知恵を」授けてくれます。そして「人を教え、戒め、正しくし、義に導いて」くれます。

困難に出会ったときに

規則正しく聖典を読めば読むほど、私は困ったときや悩みに出会ったときに聖典に頼るようになっていきました。

あるとき私は、大切な約束を交わしておきながらそれを破った人にひどく腹を立てたことがありました。何日も気持ちが悪く、仕返しすることを考えていました。実にみじめな気持ちでした。赦さないことは間違っているというのは十分承知していましたが、どうやってその気持ちを克服したらよいかわかりませんでした。悶々とした中で、私はモルモン経を取り出しました。どこを読むでもなくページをめくっていると、モルモン書の3章15節の「応報の権利はわれにあり」という主の言葉が私の目に飛び込んできたのです。

その瞬間、すべてのことが永遠の観点から見えるようになりました。私は自分の態度が間違っていたことを悟り、高慢な鼻を折られた気持ちでした。と同時にこの聖句を読んでとても心が安らぎました。主は私の気持ちをご存じだったのです。私を心にかけていてくださったのです。それからはとても素直に祈り、悪い思いを捨て去ることができました。

主と同じように理解する

主は聖典を通して何とよく私たちの祈りに答えてくださ

っていることでしょう。聖典は、私たちの交わした誓約と私たちに与えられている輝かしい約束を思い起こさせてくれる主のみ声です。私は「教義と聖約」と「高価なる真珠」を学び始めてから、祈りの答えとして受ける靈感は、往々にして聖句を通して与えられるということがわかりました。

その一例をあげてみましょう。ちょうど私がふたり目の子供を妊娠していたときのことで、私はある有名な科学者が作ったテレビ番組を見ていました。その番組は、遠方の島々の文化に及ぼす西洋文明の影響について取りあげたもので、番組の終わりに、画面は世界中の混みあった都市の光景や貧困にあえぐ人々を映し出しました。そしてその科学者は視聴者に向かって、各国の政府に産児制限の政策を講じるよう働きかけてほしいと嘆願し、さらに人口増加を抑制しなければ、世界的な惨事を招くことになること予言したのです。

私の心は暗く沈みました。私たち夫婦はもうひとりこの世に子供を送り出そうとしていたからです。私は主と同じような理解力が少しでも持てるよう、そして自分の行ないが主のみこころに添っているかどうかを教えてください。主は嘆願しました。しばらく祈り続けていると、ついに障害物を乗り越えたようなすばらしい気持ちを感じました。静かな細い声が私にこう語りかけてくれたのです。あなたは、彼の子孫をふやして、天の星のように、浜べの砂のようにするという、アブラハムに与えられた約束の成就を助けているのです。(創世22：17参照)

私はアブラハム書2章11節をあげ、主のみ言葉を読みました。「汝のすえ……によりて世界の眷族ことごとく祝福を得ん、すなわち福音の祝福にして救いの祝福、すなわち永遠の生命の祝福を得んと言ふ約束を汝に与うればなり。」

またアブラハム書3章12-14節の中では、主が族長に星空を見せこうおっしゃっています。「われ汝を殖し、また汝の後に来る汝のすえを殖してこれらのものの如くにせん。」

また教義と聖約132章31-32節を読んでいて、アブラハムに対するこの約束について主が触れているのを見つけ、私の心は躍りました。「この約束はまた汝の約束なり。汝はアブラハムより出で……この律法によりてわが父の事業は続き、父はこれによりて光栄を得たもう。この故に汝行きてアブラハムの業を為せ。汝わが律法に入れ、さらば救わるべし。」

アブラハムに対する約束は、御父のすべての子供たちに対する約束でもありました。私はバプテスマのときに交わした福音を分かち合うという誓約を思い起こしました。また同胞の重荷を負うという誓約も交わしたことを思い出しました。主は教義と聖約104章17-18節の中でこのように言っておられます。「地は物に満ち足りて余りあり。然り、われよろずの物を備えて人の子らにこれを与え、人各々を自由意志によりて動く者となす。この故に、もし何人たりともわが造りし多くの物の中より取り、わが福音の律法に従いてこれを貧しき者乏しき者に自己の取前をわかすことをせざる時は、悪人と共に地獄に落ちて苦惱を受け目を挙げて望み視ん。」

みづからを罪のない状態に保つ

モルモン経の勉強を通して深く理解できたことは、主の予言者たちは皆私たちが終わりの日にキリストの前に立ち、御父に受け入れられるため、備えるようにと願っていたことです。私は、朝10時までには必ず毎日1章ずつモルモン経を読んで勉強するように習慣づけました。ニーファイとヤコブの偉大な教え、ベンジャミン王やアルマの説教に、私は強く心を動かされました。また良心の咎めを受けることもしばしばでした。アルマ書の5章を読んでいて、アルマの前に立ちその教えに耳を傾けることは、まさしく主のみ前に立つ備えになることを悟りました。アルマは私たちにこう尋ねています。「あなたたちはいつも神の御前に罪を犯さずに居ったか。あなたたちがもしも今にも死ぬとするならば、心の中に『私は充分へりくだっている』と言い、また『私の衣は、その民の罪を贖うために降臨したもうキリストの血で洗われて白くなっている』と言えるであろうか。」(アルマ5：27)

私は特に、モーサヤの息子たちの経験に感銘を受けました。救い主の教えを生活の中で実践し、福音を同じレマン人の同胞に伝えた彼らは、何と大きな力を得たことでしょうか。私も生まれて初めて、福音を分かち合いたいという気持ちにかられて断食し、導きを祈り求めました。それからほどなくしてあの忘れられない日がやってきたのです。私たちのアパートの管理人をしている男性が、教会についてもっと詳しく知りたいと言ってきたのです。そしてまた、隣の人が我が家のドアをたたき、こう言ったのです。「お宅

は皆さんで日曜日に教会へ行っておられるようですが、どちらの教会ですか。」

モルモン経は私に、主に受け入れられたいという強い望みを抱かせてくれました。ある晩のことでした。生まれて間もない娘に起こされ、ミルクを飲ませました。娘は間もなく寝つきましたが、私は眠れずひとり夜の静けさの中で目を覚ましていました。そして、これまで自分の生活の中で変わってきた点や今後変えていかなければならないことなどに思いを巡らしていました。すると次第に心が神の方に向き、「神よ……われは汝を知り、死よりよみがえりて終りの日に救われるようわが一切の罪を捨てん」(アルマ22：18)と叫んだレーマン人の王の言葉を思い出して祈りを捧げたのです。

主はひとつずつ、私の弱点を示してくださいました。そしてその日の朝早く、私は主からすばらしい確信を得たのです。それは「私はあなたの父、他ならぬあなたの父である」という主のみ言葉でした。私はその言葉を日記に記し、これまで何度も深く思い巡らしてきました。

何年か前、若いふたりの女性に話しかけられたあの経験を、私は今違った観点でとらえることができます。ありがたいことに、私はあの経験を通して、聖典を学ぶことがどれほど大切かを知ることができました。あのときもっと多くの知識や強い証を持っていたらと残念に思いますが、今は福音の原則をさらに学び続け、実践する必要性を強く感じています。

2年前、生まれて初めて旧約聖書を読破するという目標を立てた私は、エレミヤ書の29章13節にこのようなすばらしい主の約束があるとは思ってもみませんでした。それはこのような約束です。

「主を尋ね求めるとはひたすら聖典をよく読むことであり、そうするとき私たちは必ずや永遠の生命へと導かれるのです。」

*クリスティー・ウイリアムズと夫のブライアンは、ワシントン北ステークス部レントンニューポートワード部に所属している。



聖句を覚えましょう



(聖句を楽しく暗記する方法)

私はこれまで、暗記した聖句によって霊性が高められ、誘惑に打ち勝つことができました。ですから子供たちにもぜひ、悩めるとき力となってくれる聖句を暗記してほしいと思っています。我が家でこれまでに役に立った楽しい暗記方法をいくつかご紹介しましょう。

1. 聖句をいくつかの語句または短い文に区切る。後ろの方から前の方に順にそれぞれの語句または文を声に出して繰り返し言ってみる。たとえばアルマ書37章の35節を暗記する場合、最後の「神の命令を守ることを習慣とせよ」という文を数回繰り返し言ってみる。それからその文を子供たちに言わせる。「青年の時から神の命令を守ることを習慣とせよ」という文についても同じようにする。こうして子供たちが最後のふたつの文を覚えたら、最初の「わが子よ、忘れずに青年の時知恵を得よ」という文に戻り、全部の聖句を言わせる。

2. 紙に聖句を書き、語や語句に切り離す。その聖句を何回か読み、ばらばらに切り離した語句を字を読める子供に渡し、だれが一番早く切り離した聖句を正しい順序に並べられるか競争する。

3. 暗記する聖句をポスターに書く。それを何度か声に出

して読む。それから言葉を少しずつ隠していき、聖句が全部隠れるまで繰り返す。聖句を黒板に書いて、言葉を少しずつ消しながら、全部の聖句を覚えさせる方法もある。

4. 聖句の言葉を、よく知っているふさわしい曲に合わせ

て歌う。

5. 声をそろえて聖句を読む。子供たちをふたつのグループに分け、語句や文を交互に言わせる。

創造力を働かせ工夫してみてください。いろいろな方法を試してみ、あなたの家族に最もよく合った方法を見つけてください。子供というのは、小さくてもそれなりに聖句を理解したり暗記できるものです。ですから小さな子供もこの活動に参加させてください。そして難しい語句は説明してあげてください。子供たちの努力はよく褒め、決して批判してはいけません。

子供たちを聖典に親しませることは、子供たちの永遠の幸福のために、両親ができる最大の貢献のひとつです。パウロはテモテにこのように言っています。「また幼い時から、聖書に親しみ、それが、キリスト・イエスに対する信仰によって救に至る知恵を、あなたに与えうる書物であることを知っている。」(IIテモテ3：15) □

前もって決心する

キャロリン・デブリース





約とは、約束あるいは誓いという意味です。誓約は、主に対して、ほかの人に対して、あるいは自分自身に対して行なうものです。誓約を守ることは、誠実さを表わす確かなしるしであり、靈的に進歩するためにも、またこの世で成功するためにも欠くことのできないものです。けれども、誘惑の絶えない現世にあっては、誓約を守ることがときとして難しい場合があります。どのようにして誓約を結び、またどのようにして誓約を守るかを理解するならば、そのような誘惑に打ち勝つ力を身につけ、年齢を問わずすべての人を、正しい原則へと導くことができます。

そのひとつの方法は、実際に事が起こる前に、ある特定の状況に対してどう対処すべきかをあらかじめ心に決めておくことです。次のふたつの話を読んで、考えてみてください。

事例その1

マリヤは高校を卒業して、ある大会社の秘書になったばかりの若い女性です。会社の中では、ただひとりの末日聖徒でした。新年を迎えるずっと前から、社員の間では、恒例の大晦日おおみそかのパーティーのことが話題になっていました。毎年、大晦日は仕事を早く切りあげ、夜更けまで乱痴気パーティーをするのです。

その日が来るずっと前から、マリヤはパーティーのことが心配でした。付き合いが悪いと思われたくはなかったのですが、この種のパーティーは、彼女の持っている教会の標準に合うものではありませんでした。12月31日になったら、病気ということにしようかとも考えましたが、不正直なものやはり標準に合っていないのでやめることにしました。最終的な結論は、時計の針から目を離さないように

して、会社の終業間際になったら、静かに机の上を片付け、自分の持ち物を持ってだれにも気づかれぬように会社を出ることでした。

ところが、計画を実行に移すときになると、同僚たちが集まってきて、いつの間にかマリヤはパーティー会場の真ただ中にいたのです。

そこで、マリヤは第2の計画を練りました。会場の片隅に立って、パーティーが始まったら、悟られないようにそっと立ち去ろうと思いました。ところが、間もなく数人の同僚たちがまわりに集まってきて彼女を取り囲み、意地悪くからかい始めたのです。

「一杯だけならいいだろう。」

「だれにもわかりゃしないよ。」

「酒を飲むのは、人生のたしなみってmondだよ。」

断わり、嘆願しても無駄でした。イライラしてマリヤはこう言いました。「一杯だけならいいわ。これだけ飲んで、出て行くわ。」

マリヤはグラスを手に取りましたが、やはり飲むことはできませんでした。数年前に知恵の言葉を教えてくれたプライマリーの先生の顔が浮かんできたのです。その瞬間に、彼女の試練は去りました。グラスをだれかほかの人に渡すと、断固とした口調でこう言いました。「いいえ、飲みません。今まで一滴も飲んだことはないし、きょうから飲み始めるつもりもありません。」人垣をかき分けるようにして会場を去り、コートを取ると外へ出ました。

マリヤは自分では気づきませんでした。何年前かの初等協会のクラスで、お酒は一滴だって飲まないという決心をすでにしていたのです。ただし、そのような状況に遭っ

たらどう行動すべきかを前から心の中に描いていたならば、実際の状況に際して、もっと容易に対処できたことでしょう。そうすれば、もうすでに決心はできていたはずですから、これほど優柔不断になることは決してなかったでしょう。

事例その2

第2の事例は、ジョアンという名の頭の良い高校生の話です。ジョアンは友達の間でも優秀な生徒として評判で、家から遠く離れたある有名大学の奨学生でした。1年生のとき、クリスマス休暇で家へ帰ったときのことで。末日聖徒の友達は彼女のことが少し心配になりました。同じ標準を持っていない大勢の人々の間で、どのようにして標準を守るのかと尋ねたところ、彼女はこのように答えたのです。「前はよく、教会の教えに従ってたばこやお酒は飲まないのだということを説明しようとしたけど、もういちいち説明するのはうんざりだわ。お酒を飲むことは悪いことだとは思わないわ。今は私は飲んでいないけれど。ただグラスを持ち歩いて、どこかに捨てればいいのよ。」

皆さんは、この話の結末をすぐに想像できるでしょう。間もなくジョアンは教会を去りました。彼女は困難な状況の下でどのように対処すべきかについて、前もって決心をしていなかったのです。そのために、その場その場で新たに決心し直さなくてはなりません。不幸にして、周囲の人々から受ける絶え間ない影響力に加えて、新しい環境からくるストレスが、彼女にとっては耐えがたい重荷だったのです。

誘惑にどう対処すべきかを前もって考えておけば、自信

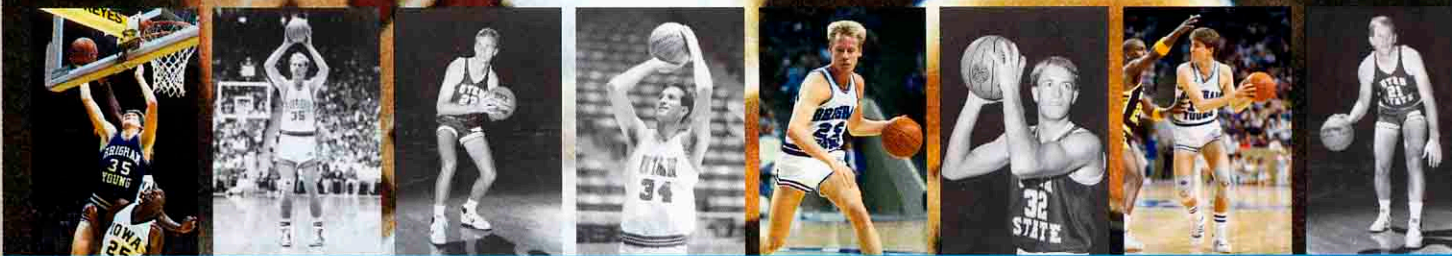
という形の盾が私たちの身を守ってくれます。しかも、困難な状況の中で決断を下す苦しみを和らげてくれます。数カ月あるいは数年前に正しい誓約をしておきさえすれば、それが決断の時にものを言うのです。つまり、正しいことを行なおうとしっかりと心に決めていれば、誘惑の力を弱めることができるのです。

このような考えは、どのような誓約に当てはまるのでしょうか。それはすべての誓約に当てはまります。特に私たちの永遠の救いにかかわること、すなわち聖典の勉強、教会での責任の遂行、神権の最大限の活用、学業での誠実な努力、知恵の言葉の実行、クリスチャンとしての愛の実践、純潔などです。特定の状況に対する一定の対処法をあらかじめ心に決めておけば、人生のほかの領域でも役に立ちます。たとえば、目標を達成すること、職業上の技能や資格を身につけること、あるいはより良い父親、母親になるように備えることなどです。

自分自身と約束を交わすときには、紙に書いたり、特に大切な友人や愛する人に話すことが役立つ場合もあります。静かに心の中だけで決意する場合であっても、自分との約束は誠実に守らなくてはなりません。ときには、謙虚な祈りの中で天父との間に誓約を交わす場合もあります。

決断の自由は、天父から与えられた多くの祝福のひとつです。私たちには自分自身を治める力が備わっていますが、みずからを治めるには自分の立場を決めておく必要があります。決断のときが来る前に誓約を立て、その誓約をどのように守るかをあらかじめ心に決めておくならば、私たちは終わりまで耐え忍び、永遠の生命を得ることができるのです。(IIニーフアイ31:14-16, 19-20参照) □

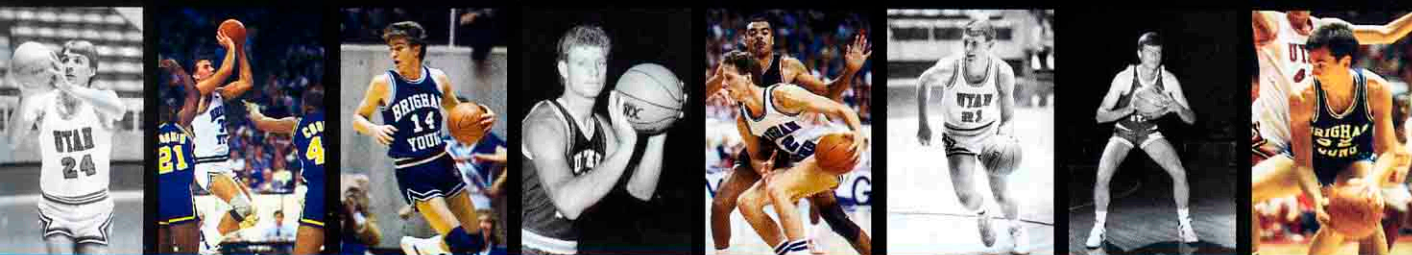
伝道に出た大学の
選手のだれに相談
しても、同じ答え
が返ってくるでし
ょう。「伝道に出な
さい」と。



チャレンジ

伝道の召し

ジャネット・トーマス
ライザ・A・ジョンソン



どのような場所に住んでいようと、どのような環境に置かれていようと、末日聖徒の若い男性は皆重大な決断を迫られます。それは伝道の召しを受け入れるか否かという決断です。多くの者はただ「はい」と答えます。一方、決心のつかない若者もいますが、それでも彼らは主に仕えたい、教会幹部の勧告に従いたいという望みを持っています。教会幹部は、すべてのふさわしい若い男性は伝道に出るようにと勧告しているのです。さらにまた、このような望みを持ちながら、学業を終えるか、兵役の義務に応じるか、働くか、あるいはこの記事の若者の場合のように、好きなスポーツを続けるかという難題に直面する者もいます。伝道の召しを受け入れない理由として、スポーツは取るに足りないことのように思われるかもしれませんが、アメリカの若者にとって、スポーツに堪能であることは大学の奨学金を受けることにもつながり、プロへの道が開かれる可能性もでてくるのです。ここに登場する若い末日聖徒も、伝道の召しを受け入れるか、大学でバスケットボールを続けるかを決断しなければなりませんでした。

体育館の中は、ゴム底の靴とボールと汗の臭いでむっとしています。一方のコーナーで、若者たちが準備運動をしています。その中のひとりが「パスメ・ラ・ペロタ！」と叫ぶと、いっせいにほかの選手も繰り返します。

「パスメ・ラ・ペロタ！」

「ケリー、どういう意味なんだ？」

「ボールをまわらせてことだよ」とケリーが答えます。

「はい、今度は『ア・ラ・イスケルダ』意味は『左へ』だ。」

「ア・ラ・イスケルダ！」全員が答えます。

こんなふうに、バスケットボールの練習をしながらスペイン語の練習が続きます。これはニューメキシコ大学のバスケットボールチームである、ザ・ラボスがブリガム・ヤング大学(B.Y.U.)との対抗試合に備えていたときの出来事です。ザ・ラボスの選手たちは、チームの一員であるケリー・グレイプスからスペイン語の特訓を受けていたのです。ケリーはチリ・サンチアゴ伝道部で伝道した経験がありました。B.Y.U.の多くの選手はスペイン語圏で伝道

した経験があり、ときどき、試合中にスペイン語でやり取りして、対戦チームを混乱させたりおじけづかせることがありました。

「もうB.Y.U.の選手にはだまされませんよ。ぼくもスペイン語圏で伝道しましたから。準備運動をする間、スペイン語の言い方を復習していたんです」とケリーは言います。

ユタ大学の選手、キース・チャップマンはドイツ・フランクフルト伝道部からの帰還宣教師です。伝道中に、キースは物事を永遠の視野に立って見ることを学びました。「伝道に出る前は、バスケットがぼくのすべてでした。でも今はもっと大切なものがあることがわかります。ふさわしさを保つこととか、次の試合だけでなく永遠のことにもっと目を向けることとか。」

ユタ州ロイのリード・ニューウィー。彼は6歳のときからバスケットの選手になることを夢見ていました。子供のころは、地域や教会のチームでプレーし、テレビで試合を見たり、父親と一緒に試合を観戦しに行ったりしました。バスケットボールは彼の人生の目標でした。

ユタ州立大学1年のとき、リードは1年生で構成される誉れ高きナショナルチームの一員に選ばれました。それ以来大学のバスケットボールに大きな貢献をしてきた彼は、そのまま行けば、翌年は一流選手の仲間入りをしていたことでしょう。しかし、彼の人生を左右したのはバスケットボールだけではありませんでした。リードはこう語っています。「大学1年のとき、私はずっとモルモン経を読んでいました。そして本当にモルモン経に対する強い証を得ました。私はモルモン経が大好きでした。それで練習が終わると、モルモン経を読むために大急ぎで家に帰ったものです。そのときからですね、気持ちが変わったのは、ずいぶん祈り断食しました。そして伝道に出るべきだという個人的な啓示を受けたのです。」

リードは伝道に出て実にすばらしい経験をしました。その経験を通して、この世のすべてのものの価値を理解できるようになりました。「こんな人に出会ったんです。その人は軍を退役した大佐で、本当にすばらしい人でした。私が

伝道を終える1週間前にバプテスマを受けました。私は彼に空港まで車で送ってもらい、出発前に少し話し合うことができました。そのとき、彼が私を見てこう言ったのです。

『ニューウィー長老、来てくれてありがとう。』私は何のことを言っているのかははっきりわかりませんでした。すると彼は私の腕をとってこう言いました。『伝道に来てくれてありがとう、と言っているのですよ。』それは私の人生で最高の経験でした。本当に感動しました。あの経験を抜きにしてその後の私の人生は考えられません。』

もうひとつリードのアドバイスに耳を傾けましょう。「ぼくはバスケットの選手ですが、伝道に出るにはだれにでもその人なりの障害があるものです。だれでも行けない理由をいろいろ思い付きますから。でも伝道に出ないで家にとどまるだけの価値のあるものなんてあるでしょうか。どんなに犠牲を払っても、生活をきちんと整え、伝道に出るように皆さんへアドバイスしたいと思います。」

伝道に出た大学の選手のだれに相談しても、同じ答えが返ってくるでしょう。「伝道に出なさい」と。主に仕えたことを後悔している者はひとりもないのです。

「伝道に出る決心は、人生で最大の決心でした」と語るのは、B.Y.U.の人気選手、マイク・スミスです。「ぼくはずっと前に伝道に出る決心をしていました。難題が起きて気持ちが変わらないうちに決心したんです。」

やがて実際に難題が持ちあがりました。マイクはカリフォルニアの高校出身の優秀選手のひとりとみなされて、多くの大学から招きを受けたのです。マイクはB.Y.U.を選び、最初の年に、31試合のうち27試合で先発メンバーに起用されました。にもかかわらず、マイクは2年間スポーツから離れ、選手としての経歴に遅れをとることを意に介さずに伝道に出たのです。

しかし、マイクと同じ町の出身でずっとマイクのファンだったある男性は、なぜマイクが今までの経歴をあえて犠牲にしてまで伝道に出るのか理解できませんでした。マイクは伝道地から、この末日聖徒でない男性に手紙を書き、その中で、福音の真実性や、モルモン経と教会の予言者に対する証を述べました。また、自分が伝道を犠牲というよ

りむしろ特権と考えていることを伝えました。

彼はマイクの証に深く感動し、その手紙を地元のカトリックの司祭のところに持って行きました。この司祭も、たまたまマイクのバスケットボールの経歴に関心を持っていたのです。司祭は1週間、毎日ミサでその手紙を読み、最善を尽くして主に仕えている若者の模範であると語ったそうです。「伝道中には、バスケットボールのコートの中では味わえない貴重な経験をします」とマイクは語ります。「勝利のシュートを決めてファンに喜ばれても、次のプレーでは誤ってボールを足にぶつけてしまうかもしれません。そうなれば、うれしい気持ちなんてどこへやらです。でも伝道地で味わう気持ち、みたまを受けて感動した経験は決して忘れないでしょう。」

同じくB.Y.U.の選手で、スペイン・セビリヤ伝道部で伝道したブライアン・テイラーにとって、伝道に出る決心をしたことは後悔するどころかすばらしい経験でした。「ぼくはカナリア諸島に行って伝道を開始するという、すばらしい機会にあずかったのです。使徒パウロのような気持ちでした。通りを歩いているとよく聞かれました。『君たち若い男がワイシャツに、ネクタイなどして何をしているのかね？なぜ水着になってビーチに行かないのかね？』私たちが何をしているのか説明すると、人々は感動して私たちの話に耳を傾けてくれて、ときには一度に150人も集まりました。『最初の示現』や『家族は永遠に』などの映画を建物の壁に映して見せると、村中の人々が見にやってきました。それから私たちは証を述べましたが、それを聞いて人々は涙を流しました。」

ブライアンはにっこり笑い、首を横に振りながら思い出すようにこう語ります。「伝道の経験とバスケットをすることとはまったく比較になりませんが、チームのために試合に勝つことはすばらしい気持ちです。でもその気持ちは長続きはしません。ところが、あの島で多くの人々に証を述べた経験は、決して忘れられないものです。その経験を人に話すだけで元気になるんです。いわば永遠のものです。」

ユタ州立大学のマイク・ジョンソンにはバスケットボール選手の血が流れています。父も伯父たちも皆ユタ州立大



上：マイク・スミス長老，アルゼンチンの求道者の家族と共に。
下左：スペイン・セビリヤ伝道部のブライアン・テイラー長老，
少女の両親はテイラー長老によって教会に導かれた。
下右：スティーブ・シュライナ長老，日本の教会員と共に東京神
殿の前で。
彼らにとって，伝道で得た経験はみな，何にも代え難いものとな
っている。

学でプレーしたので，マイクは自分も同じ道を歩みたいと思
っていました。しかし，彼は高校を卒業してすぐ伝道に
赴きました。そのとき，声をかけてくれた大学のスカウト
マンが，2年後に帰ってくる彼を待っていてくれるという
保証は何もありませんでした。

マイクはこのように述べています。「ぼくは伝道に出たか
ったのです。『私は今までなすべきことを行なってきました』
と言えるようになりたかったのです。そして，今は，
もしこれから主の助けが必要になったならば，『私はこれ
まで主の戒めを守ってきました』と自信をもってと言えるよ
うになりました。」

マイクは伝道に出ようとしている数人の若者と話し合っ
てきました。そして彼らに，一生懸命に働いて伝道に打ち
込むようにと励まし，また自分が学んだ教訓をこのように
話しています。「君たちが伝道に行き，帰ってくるときに
は，すべてが順調にいっているよ。」

このような，かつてスポーツ選手であった宣教師も，ほ
かの宣教師と同じように，やがて自分たちの働きが後にほ
かの宣教師によって報われることを知るようになります。
B.Y.U.の選手，アラン・アスルも一度そのような経験を
しました。イギリスでチラシを配っていたとき，彼と同僚
は訪ねた家を1軒1軒記録しました。「私たちは，ある女性
の家を何度か訪ねました。彼女は忙しく，あまり話をす
ることができませんでした。しかし，私はその人がよい求道
者になりそうに思ったので，伝道ノートの彼女の名前のす
ぐ横に『見込みあり』と書いておきました。すると4カ月
ほどして，この女性から手紙をもらったのです。彼女の名
前の横に，私があのコメントを書いたことへのお礼がいろ
いろと書いてありました。新しく赴任した宣教師が私の書
いたノートを見て，その女性に会いに行き，それから彼女
はバプテスマを受けたのです。さらに彼女はこれまでに何
人もの人を教会に導きました。」

ユタ大学の学生，ジョン・ハンセンは授業の始まるちょ
うど6週間前にスイス・ジュネーブ伝道部から帰ってきま
した。いくつかの点で，ジョンはバスケットを中断してよ

かったと思っています。「伝道中は霊的なこと，奉仕，福音
を広めることに全身全霊を打ち込みます。伝道は完全な改
宗とも言えます。伝道に行くよりも帰ってくる方がつらい
ものです。家に帰ってから，伝道中と同じように主に近
くあるためには相当な努力が必要です。」

昨年，B.Y.U.の4年生選手だったトム・ナイティング
は，帰還宣教師の方が確かに他の選手よりまっさっていると
述べています。「試合の仕方にも頭を使うようになったし，
知識も増えています。それに18歳のころほど感情的ではな
く，試合中でもずっと冷静です。」

さらにB.Y.U.のプレント・スティーブソンはこうつ
け加えています。「それに忍耐強くなります。試合では忍耐
が要求され，その場に応じた適切なプレーができなければ
なりません。伝道によって鍛えられることは役に立つと思
います。」

一生懸命努力するということは，伝道活動にもスポーツ
にも当てはまるようです。ユタ州立大学のダニー・コンウ
エイは，伝道を通じて試合に熟達する方法を学びました。
「何かを得たいと思ったら，本気になって打ち込み，犠牲
を払わなければなりません。私の場合，もし私が上手な選
手であるとすれば，それは私が一生懸命練習し，何かを犠
牲にしているからです。努力をしなかったら決して上手な
選手にはならなかったでしょう。」

B.Y.U.のブライアン・テイラーも同じ考えを持ってい
ます。「伝道を終えたあとでは，どのようなことでもでき
るという自信がつかます。人生で一番大変なことを成し遂げ
たわけですから。」

このように，バスケットボールが大好きな若者たちでも，
教会や伝道のみ業以上にバスケットボールが好きだとい
う若者はひとりもいません。

ユタ州立大学のジョン・ジャドキンスは，このような若
者たちの気持ちを次のように言っています。「バスケットを
しては決して味わえない喜びがあります。それは人が
教会に入って，すっかりその生活を変えるのを目にする喜
びです。」□

チャーチニュース

昨年10月1日土曜日に行なわれた第158回半期総大会午後の部会で、教会幹部が新たに支持された。

これまで七十人第一定員会会長の一員であったリチャード・G・スコット長老が十二使徒に召され、昨年5月のマリオン・G・ロムニー長老の逝去に伴って生じた十二使徒定員会の空席を埋めることになった。

また、七十人第一定員会会員であったJ・リチャード・クラーク長老が七十人第一定員会会長に、モンティ・J・ブラフ長老（ユタ州ケイスビル在住）、アルバート・カウレスJr. 長老（アリゾナ州フェニックス在住）、ロイド・P・ジョージ長老（ユタ州オレム在住）、ジェラルド・E・メルチン長老（カナダ、アルバータ州カルガリー在住）の4人が、新たに七十人第一

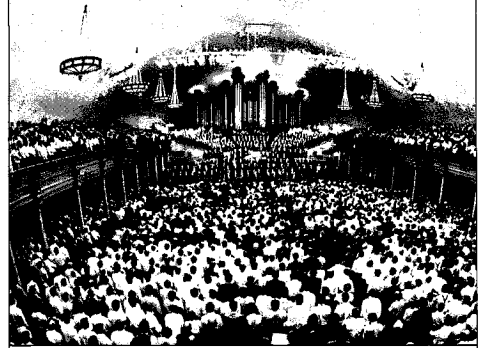
員会会員に召された。

エズラ・タフト・ベンソン大管長が、土曜日午前の部会の最初の説教の中で、「再び教会の栄えある総大会を迎えられることを喜ばしく思う」と述べた。

ゴードン・B・ヒンクレー第一副管長とトーマス・S・モンソン第二副管長が交替で各部会の司会を担当し、ゴードン・B・ヒンクレー第一副管長が教会幹部ならびに中央役員^はの支持の挙手を取った。

人々の霊性を高める場となったこの集会は、例年になく温かい天候のもとで行なわれ、テンプルスクウェアに詰めかけた聴衆で会場は埋め尽くされた。

屋外では、シートを広げたり、折りたたみ椅子を持ち込んで、花壇の周りなどに陣取り、お弁当を広げ、一日を過ごす人々で



あふれた。

ベンソン大管長がタバナクルの説教台の前に立つたび、大管長を一目見ようと、大勢の人々が会場の入口に群がった。

今大会では、何人かの新しい教会幹部も召された。以下はその略歴の紹介である。

リチャード・G・スコット長老（59歳）は、1977年4月2日に七十人第一定員会会員として召されて以来、教会幹部としてその責任を果たしてきた。

1950年から1953年までウルグアイで伝道し、1965年から1969年までアルゼンチン北伝道部伝道部長、1970年から1971年までワシントンD. C. ステーク部副ステーク部長、1972年から1977年までワシントンD. C. 地区の地区代表を歴任。1978年から1984年まで南メキシコおよび中央アメリカの地域代表管理役員を務めた。1983年10月1日には、七十人第一定員会会長に召され、1984年9月1日からは家族歴史部の実務部長を務めている。

スコット長老は、1928年11月7日アイダホ州ボカテロで、ケニス・リーロイとマリー・エライザ・スコットとの間に誕生した。1953年6月16日にはマントイ神殿でジェニン・ワトキンスと結婚し、現在3人の息子とふたりの娘、ならびに3人の孫に恵まれている。

スコット長老は、1950年、ジョージ・ワシントン大学の機械工学科を卒業し、原子力研究の諸機関が集まるテネシー州オークリッジで原子力工学の博士号に相当する課



新たに十二使徒に召された リチャード・G・スコット長老

チャーチニュース

程を習得し、機械・原子力工学の私設コンサルタントとして原子炉の有効利用のために公共事業体や電力会社で働いてきた。

彼は、平和利用のための初の原子力発電所の建設に参画し、原子力施設の建設と利用に関する2冊の本を共同で執筆している。

また12年の間、ノーチラス号からポラリス号に至る原子力潜水艦の開発に携わってきた。



七十人第一定員会会長 J・リチャード・クラーク長老

J・リチャード・クラーク長老（61歳）は1976年10月1日に管理監督会の副監督として召され、次いで1985年4月6日に七十人第一定員会会員に召された。教会幹部に召される前は、1962年から1965年まで、アイダホ州ポインシステキ部伝道部長、1965年から1970年まで同ステキ部ポイン第19ワード部監督、1972年から1974年までアイダホ州メリディアンステキ部のステキ部長、1974年から1976年まで地

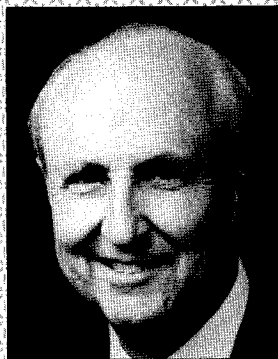
区代表を歴任した。その後1985年から1987年まで南アフリカケープタウン伝道部の伝道部長を務めた。昨年からは、伝道管理部の実務部長として働いてきた。1976年に教会幹部として召されたときには、アイダホ州にある大手保険会社の総支配人であった。

クラーク長老は、1927年4月4日にアイダホ州レックスバーグで、ジョン・R・クラークとノーラ・レッドフォード・クラークの間に生まれた。1952年にブリガム・ヤング大学を卒業後、スタンフォード大学の大学院で勉学に励んだ。

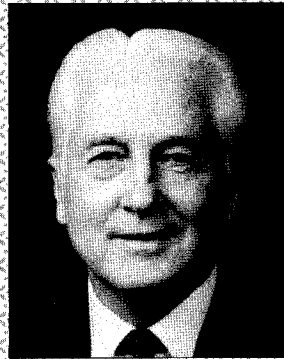
1950年6月7日にアイダホフォールズ神殿でバーバラ・ジーン・リードと結婚し、現在4人の息子と3人の娘がいる。



モンティ・J・ブラフ長老



アルバート・カウレスJr.長老



ロイド・P・ジョージ長老



ジェラルド・E・メルチン長老

新たに七十人第一定員会会員に 召された4人の長老

モンティ・J・ブラフ長老

モンティ・J・ブラフ長老（49歳）は1959年から1961年にかけて英国で

伝道し、1978年から1981年までミネソタ州ミネアポリス伝道部の伝道部長を務めた。1982年から1983年まで若い男性中央管理会で働き、1983年から1987年までユタ州ケイスビルステキ部ケイスビルワード部監

督、1985年から1986年までユタ州北部地域会長会の幹部書記、1987年から地区代表として働いてきた。

地区代表の召しを受けたとき、長老は資産管理関係の博士課程に在籍していた。

ブラフ長老は、1939年6月11日ユタ州ランドルフでリチャード・ミュア・ブラフとグエンダリン・カール・ブラフとの間に生まれた。1歳のときに父親を亡くした。

チャーチニュース

1962年8月30日にアイダホフォールズ神殿でラネット・バーカーと結婚し、1965年にユタ大学を卒業した。現在3人の息子と4人の娘がいる。

アルバート・カウレスJr. 長老

アルバート・カウレスJr. 長老 (62歳) は、1946年から1948年まで合衆国東部伝道部で宣教師として働いた。1963年から1968年までアリゾナ州スコッツデールステーク部高等評議員、1968年から1974年まで同ステーク部副ステーク部長、1974年から1980年まで同ステーク部ステーク部長、1980年から1983年までニューヨーク州ニューヨーク伝道部伝道部長を歴任、1987年からは地区代表として働いていた。

カウレス長老は、1926年にアイダホ州ドリックスで、アルバート・カウレスとルーラ・ウィルソン・カウレスの間に生まれた。

1951年にプリガム・ヤング大学を卒業し、1953年、全米最高のビジネス・スクールといわれるハーバード大学企業経営大学院で修士号を取得した後、個人投資家を対象としたコンサルタントとして働いていた。

1952年6月24日に、アイダホフォールズ神殿でローズマリー・フィリップスと結婚した。1984年6月27日に彼女を亡くしている。1987年6月8日に、ソルトレーク神殿でマリリン・ジェブソンと再婚。ふたりの息子とひとりの娘、3人の継子がいる。

ロイド・P・ジョージ長老

ロイド・P・ジョージ長老 (68歳) は、1961年から1971年までユタ州カノッシュワード部監督、1971年から1980年までユタ州フィルモアステーク部ステーク部長、1981年から1984年まで地区代表、1984年から1987年までアリゾナ州テンプ伝道部伝道部長を歴任している。

1941年から1942年の間、合衆国南部伝道部で伝道し、帰還後直ちに入隊して、空軍のパイロットとなった。

総合商社の経営を退いた後、農業に従事し、その後現在に至るまでの15年間、不動産業を営んでいた。

ジョージ長老は1920年9月17日、ユタ州カノッシュでブリール・ジョージとアルテムシア・パーマー・ジョージの間に生まれ

た。1943年1月8日に、ソルトレーク神殿でリオラ・ストットと結婚し、現在ひとりの子とふたりの娘がいる。

ジェラルド・E・メルチン長老

ジェラルド・E・メルチン長老 (67歳) は、1964年から1969年までカナダ、カルガリーワード部監督、1969年から1975年までアルバータ州カルガリー北ステーク部ステーク部長、さらにカリフォルニア州アルカディア伝道部伝道部長、アルバータ州カルガリー地域の福祉役員を歴任した。

メルチン長老は1921年5月24日に、オンタリオ州キッチンナーで、アーサー・メルチンとロゼッタ・ウィルズ・メルチンとの間に生まれた。カナダ東部伝道部で伝道する以前、1年半の間アンガスビジネスカレッジに通った。伝道から帰ったメルチン長老は、1944年から1945年までカナダ空軍で軍務に就いた。1949年から囑託として自動車販売ならびに自動車貿易に携わっていた。1945年7月12日にイブリン・ノールズとローガン神殿で結婚し、現在は4人の息子と3人の娘がいる。

新 役 員 の 任 命

10月4日から11月4日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の変動 (敬称略)

●札幌西ステーク部手稲ワード部

新監督: 岩本宏美 (前任者: 小野誠)

●札幌伝道部函館支部

新支部長: 篠原英彦 (前任者: 松橋渡)

●高崎ステーク部熊谷支部

新支部長: 大橋正弘 (前任者: 高遠茂)

●東京東ステーク部鎌ヶ谷ワード部

新監督: 池内英二 (前任者: 村上正博)

●横浜ステーク部小杉支部

新支部長: 能美知威 (前任者: 山下栄)

●北陸地方部福井支部

新支部長: 林洋一 (前任者: 竹沢護)

●大阪ステーク部東大阪ワード部

新監督: 大林一夫 (前任者: 河島明輝)

●山口地方部防府支部

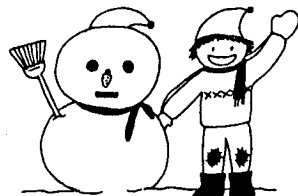
新支部長: 岡崎満正 (前任者: 月野一)

●福岡ステーク部北九州ワード部

新監督: 藤島浩 (前任者: 反田隆文)

●福岡ステーク部中津支部

新支部長: 土田善樹 (前任者: 田代純一)



編集室から

《原稿を募集しています》

●お詫びと訂正

本年度11月号ローカルページの「クモラの丘霊園」分譲のお知らせで管理料振込口座の名義を北村正隆としましたが、11月7日付をもって北村正隆が岡本亮に変更になりました。お詫び申し上げます。

●原稿を募集しています

▶各地のたよりの原稿を募集しています。来年5月号掲載分の締切は2月27日(必着)です。

▶あて先: 〒106 東京都港区南麻布5-10-30

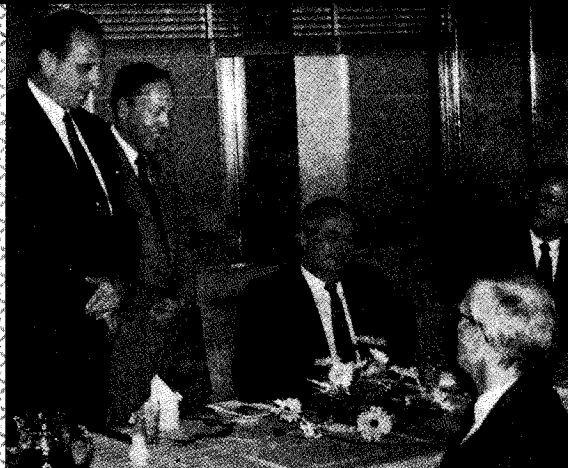
末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03(44)5264

ドイツ民主共和国

(東ドイツ)

末日聖徒

イエス・キリスト教会の 宣教師の入国を認可



クルト・レフラー氏(中央)と言葉を交わすトーマス・S・モンソン副管長(左)

ドイツ民主共和国(東ドイツ)は、教会が国内で伝道活動を行なう権利を認め、また国内の末日聖徒が宣教師として国の内外へ派遣されて伝道活動を行なうことを認可したと、トーマス・S・モンソン副管長は発表した。

モンソン副管長は、先ごろベルリンで国家評議会議長エリック・ホネカー氏および宗教問題担当の最高指導者である、クルト・レフラー氏らドイツ民主共和国首脳と会談し、このほど帰国して次のように述べた。

「国外の宣教師が東ドイツで伝道活動を行ない、国内の末日聖徒が宣教師として国外で働けば、国家間の友情を強めることになると、ホネカー議長もレフラー氏も同意

しました。また、レフラー氏は、末日聖徒の宣教師は彼らの出身国にとっても、彼らが伝道する国にとっても、代々きつと良き親善大使となってくれるに相違ないと言われました。これまでに世界中で伝道した宣教師の働きを見れば、確かに彼の評価は正しいと思います。」

モンソン副管長が出席した会談では、教会と東ドイツ政府との間で基本となる協定事項が承認された。詳しい条項については、翌月以降開かれる会談で、教会のヨーロッパ地域担当の指導者とドイツ共和国における宗教問題担当の最高指導者との間で取り決められる。

モンソン副管長はさらに「また東ドイツ政府は、当教会員がユースカンファレンス

などの教会の集会のために諸々の施設を使用する権利も認めてくれました」と述べている。

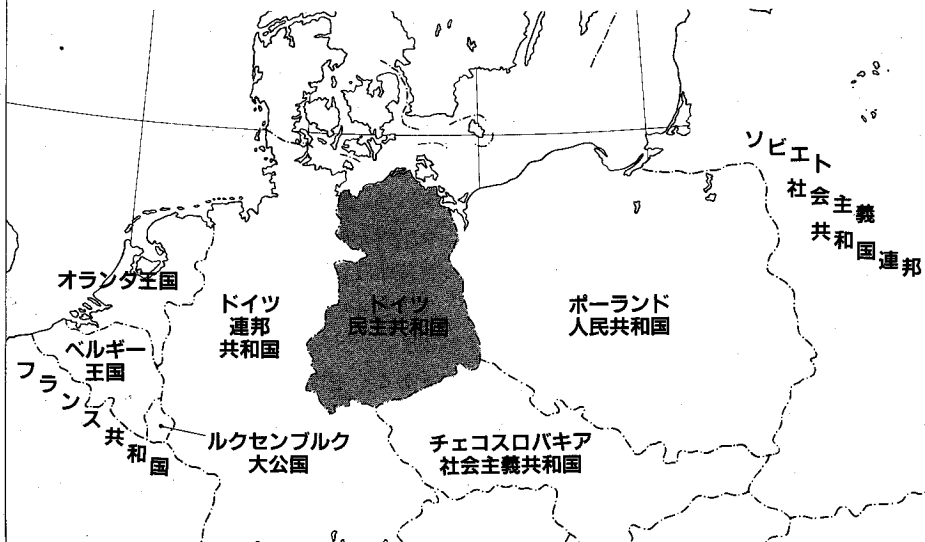
レフラー氏は、先に行なわれたインタビューの中で、東ドイツ政府は末日聖徒に尊敬の念を抱いており、その理由は、末日聖徒が家族の強い絆を重んじ、勤労に高い価値を置き、世界平和への願いにあふれ、法律をよく守る忠実な市民だからであると述べた。

続けてモンソン副管長はこのように述べた。「確かに私たちの間に信念の違いはありますが、それ以上に私たちを結びつけるものがたくさんあります。レフラー氏が列挙した事柄もその一例です。」

さらに、宗教問題担当の最高指導者レフラー氏は、ブリガム・ヤング大学の学生公演グループ「レーマナイト・ジェネレーション」を来年ドイツ民主共和国へ来るように招いたとモンソン副管長に述べた。

ドイツ民主共和国首脳との会談には、モンソン副管長と共に十二使徒定員会会員ラッセル・M・ネルソン長老、七十人第一定員会会員でありヨーロッパ地域会長会副会長を務める、ハンス・B・リンガー長老および地元の教会役員が出席した。

モンソン副管長はドイツ民主共和国に滞在中、ドレスデンの新しいステーキ部センターおよびツビッカウに最近完成した教会堂を奉献した。東ドイツでは1985年に、フライブルグ神殿が奉献されている。





DOCTRINE
AND
COVENANTS

O'LE
TUSIA
MAMONA

TE BUKA
A
MOROMONA

LEER
EN
VERBONDEN

ITIRAVACTE
A
REYANMODA

LIBRO
DE
MORMON.

Foranuel
bok

BOOK OF
MORMON



Handwritten letters and documents on a desk.